
ロミオとシンデレラ

目白皐月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロミオとシンデレラ

【Nコード】

N9358U

【作者名】

目白皐月

【あらすじ】

doriko様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したPVにインスピレーションを受けて書いた作品です。原曲どこういったの状態になると思いますが、おつきあい頂けると嬉しいです。

ピアプロに掲載しているものと重複投稿になります。

注意書き

この作品は、d o r i k o 様の「ロミオとシンデレラ」を題材に、黒刃愛様が作成したP Vにインスピレーションを受けて書いた小説です。

さて、この小説は、以下の設定になっています。

この作品のレンとリンは血縁関係はありません。また、名字が一緒だと話をまとめづらいため（どうしても” N o r e l a t i o n s ! ” のフレーズが頭をよぎって……、て、こんなことを書くとは年がバレるか）、リンとルカを姉妹にしたこともあり、この作品でのリンの名字を「巡音」にしました。

話の都合上、デフォルトの年齢だと無理があるため、二人とも年齢が上がって高校生になっています。また、ミクとクオが同学年の友達として登場します。

後、ここから先は設定変更というより、「この話のための設定」ですが。

リンが超お嬢様（P Vの彼女の家がえらくゴージャスだったのでお嬢様ということにしてしまいました）学校に車で送り迎えしてもらう、なんてことが日本の高校で可能なかどうかは知らないのですが、そういう設定にしましたので、突っ込まないでください。リン、レン共にかなり真面目なキャラに。その反動でミクははっちゃけたキャラになってしまいました。全員、今までに書いた話とは全く性格が違いますが、これはわかってやってる事です。

そして、かなりの長編になると思います。いや、なんというか、先が見えない……。

それと、原曲が原曲ですので、できたら終盤で若干の大人描写を入れないな〜とか思っています。といっても、予定は未定なので、何とも言えないのですが。ですがものすごく先になるでしょうから、大人描写目当てで読むのはお薦めしません。

更に……

書いているのが私なので、プロットの段階で、物語が原曲を離れて明後日の方向に行ってしまった（汗）って、これ、いつものことか……。

以上の点を踏まえ、「それでも構わない」という方のみ、この先をお読みください。

doriko様の原曲↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11970012>
o.jp/watch/sm666016
黒刃愛様のPV↓<http://www.nicovideo.jp/watch/sm11970012>

ロミオとジュリエット

ロミオが祭壇に近づいた。横たわるジュリエットに駆け寄って抱き起こし、揺さぶる。だけどジュリエットは動かない。ロミオはジュリエットを抱いて悲嘆にくれた後、動かないその身体を祭壇の上に戻して、両手を胸の上で組ませる。そして毒の瓶を取り出して飲み干し、ジュリエットに口づけてから、その場に倒れる。

入れ替わりにジュリエットが目を覚まし、起き上がる。倒れているロミオを見かけ、笑顔で駆け寄る。恋人が死んでいることにはまだ気づいていない。彼に触れて、死んでいることに気づく。表情が絶望へと変わる。落ちている短剣を拾い上げると、それでためらうことなく胸を刺し、崩れ落ちる。崩れ落ちながら、ロミオの手を握る。

ジュリエットが動かなくなり、幕が降りる。割れんばかりに鳴り響く拍手。再び幕が上がり、舞台の上を、出演者が一人一人現れて、笑顔で頭を下げる。

わたしは鳴り響く拍手の中、手を叩くこともせず、ただ舞台を眺めていた。

カーテンコールも終了し、ホールは明るくなった。舞台を見ていた人々は、席を立ってホールから出て行き始める。そこかしこから、終わったばかりの舞台の感想を話す声が聞こえてくる。

「衣装が素敵だったわね」

「でも、『ロミオとジュリエット』だと、やっぱりちょっと地味じゃない？」

「オーケストラの音が物足りなかった」

「そう？ あれくらいで良かったと思うけどな」

わたしはただ黙ってそれを眺めている。一人で来ているので、あ

れこれ言う相手はいない。それにしても人が多い。休日だから仕方がないか。しばらく待っていると、ようやく通路が適度に空いてきた。プログラムを手に、立ち上がって出口へと向かう。

ロビーに出た時だった。突然、わたしは強く押された。誰かがぶつかったのだ。急なことだったため、わたしはバランスを崩し、床に勢いよく倒れこんだ。

驚いて辺りを見回すが、わたしにぶつかった誰かは、既に立ち去ってしまっていた。小さくため息をついて、立ち上がろうとする。その時、左の足首に激しい痛みが走った。

「……痛っ」

どうやら、さっき倒れた時に変な風に捻ってしまったらしい。足首は、ずきずきと遠慮のない痛みを訴えてくる。が、床に膝をついてうずくまっているわけにもいかない。わたしは無理を押して立ち上がろうとした。その時だった。

「大丈夫？」

誰かがわたしに声をかけてきた。そちらを向くと、わたしと同じぐらいの年齢の男の子が立っている。わたしを見て、驚いた表情になった。

「……あれ、巡音さん？ どうしたの？」

近づいてくると、わたしの近くに膝をついてしゃがみこんだ。わたしの名を知っているということとは、知り合いなのだろうが……顔に見覚えがない。

「ごめんなさい。誰だったかしら？」

向こうはやや呆れた表情になった。

「同じクラスの鏡音レンだよ」

わたしは目の前の男の子を顔をもう一度見たが、やはり思い出せなかった。とはいえ、それをそのまま言ったら失礼になるだろう。

「ああ、ごめんなさい……制服じゃないと感じが違うんでわからないかったの」

鏡音君はふーんと呟いて、わたしに「で、どうしたの？」と訊い

てきた。

「転んだ拍子に足をくじいたみたい」

「立てそう？」

「……多分」

「俺につかまりなよ」

手が差し出される。わたしは差し出された手を取ろうとして、ためらった。そうしていいものだろうか。

「遠慮しなくていいって。足、相当痛いんでしょ？」

重ねてそう言われたので、わたしは鏡音君の手を取った。鏡音君はわたしの腕を自分の肩に回すようにして、わたしを立たせてくれた。

「じゃ、俺に体重かけて」

「え……？」

わたしが戸惑っているうちに、鏡音君はわたしを支えて、ロビーの椅子に連れて行ってくれた。

「ちよつと待ってて」

そう言って、鏡音君はどこかに行ってしまった。わたしは、左の足首に触れてみた。……腫れ始めている。どうやら、かなりひどく痛めてしまったようだ。

どうやって帰ろうか、と考えていると、鏡音君が戻ってきた。手に、氷の入ったビニール袋を持っている。

「ほら、これで足冷やしなよ」

わたしはビニール袋を受け取って、足首に当てた。冷たくて気持ちがいい。

「ありがとう。どうしたの、これ？」

「その売店でもらってきた。足痛めて歩けない子がいるって言うて。……巡音さん、これからどうする？」

そう言われて、わたしは、迎えの車がもう来ているだろう、ということに気がついた。

「迎えが来る予定になっているの。だから、そこまで行けばいい

んだけど」

「迎え？ そう言えば、巡音さんのところって確かすごかったよね」
こういう時は、どう答えればいいのだろう。……わからない。わたしは口ごもった。

「じゃ、そこまで送ってくよ」

「え……いいわよ。鏡音君に悪いわ」

「けど、その足じゃ歩くのも辛いんじゃない？ 俺なら平気だから気にしないでいいよ」

わたしは少し悩んだ結果、鏡音君の申し出を受けることにした。
携帯で連絡すれば来てくれるのはわかっているけれど、劇場のロビーで大騒ぎされるのは見たくない。

「本当にいいの？」

「くどい。男に二言はない」

わたしは鏡音君に助けてもらって、もう一度立ち上がった。

「巡音さん、プログラム忘れてる」

わたしは、ああ、と言って、プログラムを手にとった。それから、彼の肩を借りて、出口へと向かった。

劇場の外に出ると、少し離れたところに、迎えの車が来ているのが見えた。運転手がわたしの姿を見て、血相を変える。……だから嫌なの。

「リンお嬢様っ！ どうなさったんですか！」

「……転んで足を捻ったの。歩くのが辛くて困っていたら」

と言って、わたしは鏡音君の方を見た。

「助けてくれたのよ」

「そうですか。お嬢様がお世話になりました」
運転手が頭を下げる。

「困った時はお互い様ですから、気にしないでいいですよ」

わたしを車の後部座席に乗せると、鏡音君は「それじゃあ、また明日学校で」と言って去って行った。運転手がわたしを見る。……

ああ、鏡音君に口止めしておけばよかった。

「お嬢様、お知り合いで？」

「高校のクラスメイト。会ったのは偶然よ。別に待ち合わせしていったわけでもなんでもないから、勘違いしないで。待ち合わせしていったのなら、むしろ送って来ないわ」

「……そうですか。お嬢様がそう言われるのでしたら」

わかってる。この人は悪くない。雇い主である父にきつく言われているだけのことから。わたしはため息をついた。

「家に帰る前に病院に寄って」

「かしこまりました」

休日診療している病院で診てもらったところ、かなりひどい捻挫だと言われた。ギプス……とまではいかなかったけれど、嚴重に足首を固定されてしまう。何だか気が滅入ってくる。

手当てが終わったので、家に帰った。こういう時は広い家が恨めしい。足を引きずりながら居間に入っていくと、ルカ姉さんが本を読みながらお茶を飲んでいた。

「ただいま、ルカ姉さん」

ルカ姉さんは本から顔を上げて、わたしを見た。

「お帰り、リン。オペラを見に行ってたの？」

「今日見に行ったのはオペラじゃなくてバレエよ」

「……あら、オペラかと思っていたわ。演目は何だったの？」

「『ロミオとジュリエット』」

説明の必要がないくらい有名な悲劇。有名な作品だから、オペラもあるし、バレエもある。

「シェイクスピアの悲劇ね」

「ええ」

ルカ姉さんはそこまで話すと興味を無くしたのか、視線を広げていた本に戻した。ウェーブのかかった長い髪がふわつと揺れる。今日は休日ですつと家にいたはずなのに、その格好には糸一筋の乱れ

もない。

「ルカ姉さん、お母さんは？」

「多分キッチンでしょう」

ちようどその時、お母さんが部屋に入ってきた。わたしの足を見て、表情を変える。

「お帰りなさ……リン、どうしたのその足は！？」

「転んでくじいたの。全治一ヶ月だって。ただの捻挫だから心配しないで」

「ならいいけど。あまり無理しないで、今日はもうゆっくり休みなさいね。リン、あなたもお茶にする？ クッキーが焼いてあるの」

お母さんの趣味はお菓子作りだ。最近はレシピ本も出したりして、ちよつとは話題になっているらしい。

「じゃあ食べる」

お母さんは、ちよつと待っててね、と言って、奥へと引っ込んでいった。……我が家は見えてのとりの豪邸で、お手伝いさんも複数いる。頼めばお茶ぐらいすぐに来るけれど、お母さんはこういう時、自分で動きたがる。

まもなく、お母さんがお盆に紅茶のカップとクッキーを入れたお皿を乗せて戻って来た。

「たくさん食べて……と言いたいところだけれど、夕食が入らなくなっても困るから、程ほどにね」

「わかつてるわ。いただきます」

お皿の上には、様々な形の型抜きクッキーが乗っている。猫や、鳥や、花の形。どれも色とりどりのアイシングがかかっている。わたしは猫の形のクッキーを手にとった。……当たり前だけど、甘い。わたしが小さい頃から、お母さんはこういう甘いお菓子を作るのが好きだった。小学校の頃は、帰宅すると甘い匂いが漂っているのが、純粹に嬉しかった。たとえそれを口にするのがわたし一人でも、

ロミオとジュリエット（後書き）

曲をモチーフにした長編に取り組んでみることにしました。

……とはいえ、注意書きにも書きましたが、「原曲どこいったの」状態になることはほぼ確実です。

既にリンのイメージがシンデレラというより眠り姫だし……。

今回は、折角なので、今まで使ったことのない手法にも着手してみようと思っています。

その安らぎは薄暗く

次の日、普段どおりに登校したわたしは——車で送り迎えしてもらっているのに、遅刻することはまずない。たとえば足を痛めていても——教室に入ると、自分の席についた。始業まではまだ時間がある。時間を潰そうと、わたしは持ってきた文庫本を広げた。

そんなとき、後ろから声をかけてきた相手がいた。

「おはよう、巡音さん」

振り向くと、鏡音君が立っていた。たった今、登校してきたところらしい。

「あ、おはよう、鏡音君」

「足の具合はどう？」

心配されているみたい。

「捻挫で全治一ヶ月って言われたわ」

「じゃ、当分大変だね」

確かに少々不便だ。でも別に、たいしたことじゃない。

「骨を折ったわけじゃないわ。大丈夫よ」

「まあ、そりゃそうだけど……」

「昨日はありがとう」

「気にしないでいいよ。ところで、何読んでるの？」

わたしは本の背表紙を鏡音君に向けてみせた。

「『椿姫』か」

「ええ」

ちょうどその時、また別の声が飛んできた。

「リンちゃん、おはようっ！」

「あ、ミクちゃん」

同じクラスの初音ミクちゃん。わたしとは幼馴染。

「じゃ、俺はこれで」

ミクちゃんが来たのを見ると、鏡音君は自分の席へと去って行っ

た。ミクちゃんがだだつとこっちに駆け寄ってくる。

「ねえねえリンちゃんっ！ 今話してたの鏡音君でしょ？」

「そうだけど」

「いつ仲良くなったの？」

わたしはため息をつきつつ、ミクちゃんに昨日のことを話した。

劇場のロビーで転んで足をくじいてしまい、困っていたら鏡音君が通りかかって手を貸してくれたことを。

「そんなすごいことがあったんだ……」

話を聞いたミクちゃんは、妙にきらきらした目でこっちを見ている。……どうしちゃったんだろう。

「別にすごくないわ。ただの捻挫よ」

「怪我の話じゃないんだけど……」というか、鏡音君は意外といい人だったのね」

何が言いたいのかわからない。

「ミクちゃんは、鏡音君のことよく知ってるの？」

「わたしはそうでもないけど、クオが仲いいのよ。一年の時同じクラスだったし、部活も一緒だから」

ミクちゃんが「クオ」と呼ぶのは、ミクちゃんの従弟のミクオ君のことだ。ミクちゃんと同じ年で、目下一緒に住んでいる。ミクオ君の両親が、仕事で海外に行っているからだ。ミクオ君、確か演劇部だったわよね。ということは、鏡音君も演劇部なんだ。

ミクちゃんはまだ何か話したそうだったけれど、始業のベルが鳴ったので、自分の席へと戻っていった。

その日の授業は、何事もなく終わった。今日は部活の無い日だったし、ミクちゃんは用事があるというので、わたしは真っ直ぐ家に帰った。

帰宅してみると、お母さんは出かけていた。今度出すレシピ本の打ち合わせがあるって言っていたっけ。居間のテーブルの上に「お

やつにゼリーを作っておいたから、お手伝いさんに出してもらって」というメモが置いてある。わたしはちよつと考えてから、ゼリーには手をつけずに二階へと上がっていった。

一つのドアの前で立ち止まり、叩く。しばらくすると、中から「うーん、誰え？」という声が返ってきた。

「リンよ」

「あゝ、リンか。鍵がかかってないから入ってきていいよ」

わたしはドアを開けて中に入った。広い部屋の中は物が散乱している。平たく言うと、散らかっている、ということだ。ベッドの上で、うずくまる人影が一つ。

「……寝てたの？ ハク姉さん」

「あ……うん、まあね。睡魔に耐え切れなくて」

ぐしゃぐしゃに乱れた髪のまま、ハク姉さんは頷いた。今起きたばかりといった顔をしている。この分だと、朝からずっと寝ていたのかもしれない。

「今は夕方よ」

わたしが思わずそう言うと、ハク姉さんはわたしを睨んだ。

「リン、あんたまで姉さんみたいなこと言う気？」

「そんなつもりじゃ……」

「あゝ、頭痛い……あれ、リン。あんた足どうしたの」

「昨日転んでくじいたの。全治一ヶ月って言われたわ」

「そりゃ大変ねえ」

ハク姉さんは身体を起こすと、ベッドの上に真っ直ぐ座りなおした。わたしは部屋の中に入って、椅子の一つに乗っていたものを下ろし、そこに座る。立ったままだと辛い。

「あんたがここに来るってことは、みんないないのね」

「ええ。ハク姉さん、何か食べる？」

「……あの人の作ったものはいらないわよ」
「いつもこうだ。」

「で、リン。あんたその話するためだけに、あたしの部屋に来たわ

け？」

「……違うけど」

「いらない気回さなくていいわよ」

ハク姉さんはため息混じりにわたしを見た。

「あんたは姉さんみたいにならないでよ。かといって、あたしみたいになってもだめよ。……でも、難しいだろうなあ」

わたしの家庭は少し複雑だ。仕事熱心な父親に専業主婦（本は出しているけれど）の母親、そして三人の娘。長女は父親の許で働いている。次女は大学生、三女は高校生。こう書けば、普通の家庭に見えるだろう。もっともわたしの父は大きな企業グループの社長だから、これからわたしが書くごたごたがなくても、普通の家庭とは言いがたいだろうか。

わたしたちと、今、わたしが母と呼んでいる人には血の繋がりが無い。それだけではない。ルカ姉さんと、ハク姉さんとわたしは母親が違う。ルカ姉さんを産んだ人は、ルカ姉さんが三歳の時に、父と別れて家を出て行った。父はすぐわたしたちの実母と再婚して、ハク姉さんとわたしが産まれた。そしてわたしたちの実母だという人は、わたしが二歳の時にやっぱり父と離婚した。そして父が再婚したのが、今の母だ。子供はできなかつたけれど、離婚することもなく、現在に至っている。

わたしは二歳だったこともあり、実母の記憶はほとんど無い。だから今の母を「お母さん」と呼ぶことに抵抗はない。けれど、その時もう六歳だったハク姉さんは違った。「あんな人お母さんじゃない」と何度も駄々をこねて、父と母を困らせた。その時のことを今も引きずっていて、未だに母のことを「お母さん」とは呼ぼうとしない。

そういったことがどの程度関係しているのか、わたしにはわからない。けれど、ハク姉さんと両親の軋轢は、年を重ねることにひど

くなつていった。学校にもまともに行かなくなり、今ではこうして部屋に引きこもってしまっている。父が何かしたらしく、大学に籍はあるのだけれど、一度も登校したことはない。

そんなわけで、最近では家の中では、ハク姉さんの話題はタブーになつてしまっている。少しでも話題にしようものなら、父は怒り出すし、母は泣き出しかねないからだ。わたしもあれこれ言われるのが嫌で、ハク姉さんの部屋に行くのは、他の家族がいない時にしている。

でも、わたしはハク姉さんのことは嫌いじゃない。……血の繋がった姉だから？ ううん、多分、違う。

その安らぎは薄暗く（後書き）

二話目です。ミクとハクが登場。

リンの家庭の事情を書きながら、三回結婚した某ノーベル賞作家のことを思い出していました。いやあの人とはタイプが違いますけどね。家庭が滅茶苦茶になっているという点は共通してますが。

三話目は語り手が変わります。

クオの困惑（前書き）

今回のエピソードはクオ視点。

クオの困惑

その日の昼、ミクからメールが入った。「放課後ちょっと相談したいことがあるから、いつもの喫茶店に来てね」と書いてある。一緒に住んでいるんだから、わざわざ俺を呼び出さなくてもいいと思うんだが。

ミクは俺の従姉だ。俺の両親は現在仕事で海外赴任中で、俺は父親の兄である、ミクの父のところの中三の時から預けられている。同年のミクは、外見はすごく可愛い。いや実際、そこのアイドルなんか目じゃないくらいに可愛い。スカウトが来ないのが不思議なぐらいだ。でも性格の方はというと……。

「あつ、クオ！」

放課後、待ち合わせ場所の喫茶店で俺を見かけたミクは、笑顔で手をぱたぱたと振った。

「よっ」

ミクの向かいに座り、メニューを眺める。十月に入っただけ、今日は暑い。注文に来たウェイトレスに、アイスコーヒーを注文する。ミクはアイスココアを頼んだ。

「で、なんだ？ 相談したいことって」

「あ、うん。あのさあクオ、鏡音君と仲いいよね？」

「なんだよいきなり」

レンは高校に入ってから友人で、まあ、親友と呼んで差し支えない仲だ。ちょっと何を考えているのかわからないところがあるが、基本的にはいい奴だと思う。

「調査よ調査。クオ、鏡音君って、今つきあっている人はいる？」

「はあ？ なんでミクがレンの交友関係を気にするんだ。と思いつつ、律儀に答えてしまう自分が悲しい。」

「今はいないはずだけど。去年の今頃に彼女と別れたって聞いてから、新しいのができたという話は聞いてないし」

この前の学祭の時も、来ていたのはお姉さんだけだった。彼女がいたら連れてくるだろう。

「じゃあ今フリーなんだ。ね、前の彼女と別れた理由って何？」

「なんでそんなこと訊くんだよ」

「だって知りたいんだもん。浮気性だったりすると困るし」

誰が困るんだよ。

「なんか……相手の子に別に好きな人ができたらしい。学校が違うからつきあいの継続が難しかったんじゃないのか。詳しいことは聞いてないから俺も知らない」

「じゃ、浮気とか暴力とかじゃないのね。まあ、真面目そうだし大丈夫だと思ったけど。これならOKだわ」

ミク……お前は、テレビの人生相談の見過ぎじゃないのか？

「何がだよ。おいミク、自分一人で納得してないで、俺にちゃんと説明しろ」

ここで、俺はある可能性を思い当たった。

「なあ、ミク……。お前、もしかして、レンのことが好きなのか？」

ここでミクに「はい」と答えられたら、俺はレンとミクの仲を取り持たなきゃならないのか？ そりゃ、レンなら彼氏としても充分ミクと吊り合うだろうが……正直、その光景を想像したくない。……あいつぐらいなんだよ。俺に「ミクを紹介してくれ」って言うて来なかったの。

「え？ 嫌だ違うわよ」

ミクはくすくす笑いながらそう言った。この笑い方からすると……本音だな。ごまかしてるわけじゃなさそうだ。うん。

……って、なんで俺はほっとしてるんだ？

「じゃあ何が『これならOK』なんだ」

「鏡音君とリンちゃんの仲を取り持ってもOKってこと」

……はい？

「どこからそういう話が出てくるんだ」

リンちゃん……巡音さんのことか。ミクのちっちゃい頃からの仲

良しだ。俺はあんまり話したことがないからよく知らない。ミクとはタイプが違うが綺麗な子で、二人で並んで歩いているとかなり目立つ。まあ、「高嶺の花すぎて話しかけがたい雰囲気」でもあるんだが……。巡音さんは巡音グループのトップの娘、ミクはミクで初音コンツェルン社長令嬢で、どちらも筋金入りのお嬢様だから仕方ないかもしれないが。

え？ 俺？ 俺は別にそんな大層なご身分じゃないですよ。うちの父親は、一族の会社を嫌がって飛び出してた変わり者だし。もともと家族としての縁を切ったわけじゃないから、今、俺はここにこうしているわけだけども。

「今日ね、リンちゃんと鏡音君が話をしてたの。それを見てわたしはぴんと来たのよ」

「……何が」

ああ、自分の声がどうしようもなく疲れているのが自分でもわかる。でも、ミクは気づいてくれない。

「あの二人は絶対お似合いだって！」

こぶし握って断言するミク。俺はテーブルの上に突っ伏したくなるのを必死でこらえた。というかさあ……。

「なんでそこでお前が盛り上がるんだよ」

「えゝ、だって、高校生活勉強ばかりじゃ淋しいじゃない？ リンちゃんが彼氏を作るチャンスをものにしてあげるのが、親友の務めってものでしょ？」

どういう理屈だ、それは。つか、余計なお世話って言葉を知らんのか。

「お前だって彼氏いないじゃないかよ。他人の世話焼く前に、自分をどうにかしたらどうだ？」

俺がそう言つと、ミクは怒り出した。

「しょうがないじゃない！ わたしにつりあうようないい男がいないんだから！」

お前の基準が厳しすぎるんだよ、とは、口が裂けても言えないな、

こりや。というか、彼氏にしたい男の条件が「世界で一番お姫様って扱いをしてくれる人」ってのは一体何なんだ。そんなこと言っていると、一生彼氏ができんぞ。俺はむっつりした気分で、アイスコーヒーを一口啜った。

「それにしても……お前それだけの理由で、レンに巡音さん押しつける気か」

巡音さんは確かに可愛いけど、俺だったらつきあいたいとは思わない。なんつーか、雰囲気がい暗いんだよ。正直、一緒にいたら疲れそうだな。

「クオ……それ、どういう意味？」

「げ、口が滑った……ミクの目が据わっている。俺の背筋を冷たいものが流れ落ちた。」

「ミ、ミク……そんな怖い顔するな」

「『レンに巡音さん押しつける』って、どういふつもりで言ってるの？ リンちゃんはわたしの友達よ？ クオは、リンちゃんをそういうふうに通っているの？」

「う……本音を言ったらミクに確実に殺される。何とかごまかさないで。」

「い、いやだからさ……レンの気持ちはどうなるんだよ？ お互いの気持ちが大事だろ。レンにせよ巡音さんにせよ、好みは逆かもしれないぞ」

必死で言い訳を探した結果、出てきた台詞はこれだった。

「それは……まあそうだけど……」

不承不承という様子でミクはそう言った。どうやら、最悪のルートは免れたらしい。

「でも、うまくいくかもしれないでしょ？」

ミクは思ったよりもしつこかった。何をそんなに必死になっっているんだろ。俺にはさっぱりわからん。

「可能性がないとは言わないが……」

「じゃあやるわよ」

「何を」

「二人の仲を取り持つの！」

勘弁してくれ。何で俺がそんなことしなくちゃならないんだ。

「クオ、手伝ってくれるわよね？」

そんな面倒なことに関わりあうのは嫌だ。けど、そう言ったらミクが怖い。何をされるかわからない。

「……わかったよ。で、俺は何すりゃいいんだ。言っとくけど、レンを巡音さんときあうよう説得するのは無理だぞ」

「そんなこと頼まないわよ。あのね……」

嬉々として「作戦」とやらを話し出すミク。何が楽しいのか知らないが異常にはりきっている。

すまん、レン。俺の日常の平穏のためにも、お前は巡音さんとうまくいってくれ。

クオの困惑（後書き）

ミクオを書くのはこれが初めてです。あ、それを言ったらハクもか。この話の場合、主役二人が序盤はあまり積極的に動いてくれないので、どうしても両サイドで背中を押してやる人が必要なんです。レンサイドのそのキャラクターを誰にするのかはかなり悩んだんですが、最終的にミクオになりました。カイトの年齢を下げることも考えたんですが、どうもイメージとあわなくて……。

余談ですが、ハイテンションなミクは書いていて楽しい。

まるでもの凄い鍛冶屋の中に

劇場で足をくじいてから一週間が過ぎて、また日曜日がやってきた。もともと予定の入っていないかった日だし、足もまだ痛むので、当初は自宅で大人しくしている予定だった。けれど、ミクちゃんから「うちに遊びに来ない？一緒にホームシアターで映画でも見ましょう」とお誘いが来たので、出かけることにした。

「リン、出かけるのか？」

出かける支度をして階下に行くと、珍しくお父さんがいた。お父さんは仕事が忙しいので、休日でも家にいることは少なかつたりする。

「ええ。ミクちゃんからお誘いが来たから、ミクちゃんの家に行ってきます」

「向こうのご家族に失礼のないようにな」

ミクちゃんのお父さんが経営している初音コンツェルンは、巡音グループとは深い繋がりがある。だから、わたしの交友関係にうるさいお父さんも、ミクちゃんとのつきあいだけは口を挟まない。……いや。

本当のことを言うと、一度だけ挟もうとしたことがあった。

……思い出しちゃ、だめ。

「行ってきます」

家を出ようとすると、お母さんが「これを持っていきなさい」と、ケーキを入れた箱を渡してくれた。ミクちゃんは甘いものが好きだから喜ぶだろう。わたしは家を出て、車でミクちゃんの家に向かった。

「リンちゃん、いらつしゃい」

ミクちゃんの家には、ミクちゃんしかいなかった。

「ミクちゃん、お父さんとお母さんは？」

「今日は二人とも、イベントがあるとかで出かけてるの。さ、あがつてあがつて。あ、それ何？」

ミクちゃんはめざとい。わたしは「お母さんから」と言って、ケーキの箱を渡した。ミクちゃんは箱を開けて、中のケーキを確認すると、嬉しそうな顔になる。

「わあ、お手製ケーキだ。リンちゃんのお母さんにありがとうって言うておいてね」

ミクちゃんはお手伝いさん呼んで、ケーキの箱をことづけた。

「今日の映画はDVDコレクションからえりすぐったのを用意してあるから、楽しみにしててね」

わたしはミクちゃんと一緒に、ホームシアターが設置してある奥の部屋に向かった。

「リンちゃんは座ってて。今映画の準備するから」

言われたのでソファに座る。目の前のテーブルには、DVDが何枚も積んであった。ミクちゃんはその中から一枚を手取る。と、その時。部屋のドアがバタンと音を立てて開いた。

「あれ、ミク。お前、なんでここにいるんだ」

入ってきたのは、ミクちゃんの従弟のミクオ君だった。それと、何故か鏡音君が一緒にいる。

「あ、クオ。今日はリンちゃんと映画を見ようと思って」

「ちよつと待て。今日は俺がホームシアター使う日だぞ」

「そんなの聞いてない」

ミクちゃんとミクオ君は、何やら揉めはじめた。

「何言ってるんだミク。俺、昨日ちゃんと話しただろ」

「聞いてないってば」

「お前、先週もホームシアター独占してただろ。今日は譲れよ」

「えゝ、嫌ゝ。折角リンちゃん呼んだんだし」

「やかましい。こっちだって都合があるんだよ」

二人の口論は収まらない。わたしは困ってしまった。

「ミクちゃん……。わたし、今日は帰ろうか？」

「ダメっ！ リンちゃんがクオに遠慮することないのっ！」

「あゝ、じゃあ俺が帰る」

「レン、帰るんじゃないっ！ 俺をこの状況で一人にするなっ！」

わたしは、思わず鏡音君と顔を見合わせてしまった。これじゃあ帰るに帰れない。どうしたらいいんだろう？

と、ミクちゃんが立ち上がった。

「……ちよつとクオと話をつけてくるから、リンちゃんはここで待って。帰っちゃダメだからね」

「レン、俺が戻ってくるまで勝手に帰るなよ」

ミクちゃんとミクオ君は部屋を出て行き、わたしは鏡音君と部屋に残されてしまった。……なんだか気まずい。こんな風に、よく知らない人と部屋の中で二人きりになるのは初めてだ。

「……いつも、ああなの？」

ちよつとしてから、鏡音君がそんなことをわたしに訊いてきた。

「え、いつもって？」

「クオと初音さん」

「大体あんな感じかな」

ミクオ君のことはよく知らないけれど、ミクちゃんといるといつも賑やかなのは確かだ。

「大変だなクオも。あ、そっち座っていい？」

わたしが頷くと、鏡音君はソファの少し離れた位置に座った。

「あの二人、どれぐらいで戻ってくると思う？」

「さあ……わたしも、あんなに派手に揉めてるのは初めて見たし」
わからない、としか言いようがない。

「クオの奴一体何やってんだか……。そっぴや巡音さん、足の具合はどう？」

「まだ痛いけど大丈夫よ」

「巡音さんは、初音さんとは仲いいの？」

「ええ。幼稚園の頃からのつきあいだから」

「そりゃ長いね」

そこで一度話が途切れた。そのまま沈黙が落ちる。ものすごく気まずい。

ミクちゃんとミク才君はなかなか戻ってこない。早く戻ってきてくれないだろうか。

「巡音さんたちは、今日は何見る予定だったの？」

唐突に、鏡音君が口を開いた。

「え？」

「いやだからさ、映画。俺とク才はホラー見る予定だったんだけど、そっちは何を見る予定だったのかわかって思ってた」

「聞いてないの。ミクちゃんは『楽しみにしてて』としか言わなかったし。でも、多分ラブコメじゃないかな」

ミクちゃんはラブコメや青春映画が好きだ。そういう映画を見る時のミクちゃんは、とても楽しそう。

「初音さんはラブコメが好きなのか。ク才はああいうの苦手みたいだけど」

「そうなの？」

「前そういう話をしてたよ。あれじゃ度々揉めてるだろうね。巡音さんは？」

わたしは鏡音君が何を訊きたいのかよくわからず、返事に詰まってしまった。

「だから、ラブコメとかが好きなの？ それとも悲恋物の方がいい？」

「え……」

あんまりそういうことを考えたことはない。だから、答えようがない。ああもう、ミクちゃん早く戻って来ないかな。

「単純にどっちが好きなのかって話なんだけど。あ、どっちも好きなの？」

「……………」

「この前『ロミオとジュリエット』見てたし、『椿姫』読んだりし

てたから、巡音さんって悲恋物が好きなのかって思ってたんだよね」
「あれは、たまたまそういう組み合わせになっただけで……」

『ロミオとジュリエット』を見に行ったのは、いつも行く劇場にかかっていたからであって、別にあれが『コッペリア』でも『くるみ割り人形』でも構わなかった。『椿姫』にしても、適当に家の書棚から持ってきただけであって、是が非でも読みたかったわけじゃない。

「……巡音さん、俺何か悪いこと訊いた？」

不意に、鏡音君がそう口にした。

「え？」

「あ……いや……」

……また沈黙。何だか息苦しい。時間だけが過ぎていく。時計の針の音が、何だか妙に大きく聞こえる。

やっぱり帰ってしまおうか。と、その時。ドアが開いた。

「ごめんね、二人とも。待たせちゃって」

ミクちゃんとミクオ君が戻って来たのだ。わたしはほっとして、大きく息を吐いた。

「ミクちゃん、お帰り」

「とりあえずクオとは話がついたから」

につこりと笑って、ミクちゃんは隣のミクオ君を見た。

「で、結論は？」

鏡音君が尋ねる。

「うん。今日のところは四人で揃って映画を見ようって」

……え？ わたしは思わず鏡音君の方を見た。鏡音君もこの結論は予想外らしく、驚いている。

「クオ、お前、それでいいの？」

「しょうがねえだろ。レン、悪いが今日はつきあってくれ。俺、この状況で一人になりたくない」

「というわけだから、詰めて詰めて」

ミクちゃんがソファにやってきて、わたしを軽く押した。わたし

は押された方向、つまり鏡音君が座っている方向に詰める。ミクちゃんもわたしの隣に座った。

「じゃんけんでわたしが負けたから、最初の映画はクオが選んだ奴だけど、リンちゃん、辛抱してね」

「ミク、お前、一々うるさいよ」

プレイヤーにDVDをセットしているミクオ君が、不満そうにそう言った。リモコンを手に、ミクちゃんの反対側の隣に座る。

そして、映画が始まった。

「クオのバカっ！ 変態っ！」

「……………」

「何考えてんのよっ！ 信じられないわっ！」

「……………」

映画上映会は十分も経たないうちに中止に追い込まれていた。ミクちゃんが悲鳴をあげて、ミクオ君の首を絞め始めたからだ。

「あんなグロい映画見せるなんてっ！ クオの悪趣味悪趣味悪趣味っ！」

「……………」

ミクオ君が再生したDVDは、鏡音君がさっき言ったとおり、ホラー映画だった。ゾンビが人を襲う話、らしい。らしいというのは、よく見ている暇がなかったから。で、画面にそういうシーンが映るやいなや、ミクちゃんが盛大な悲鳴をあげ、ミクオ君に飛び掛かったというわけだ。

「ねえ、巡音さん」

リモコンの停止ボタンを押した後で、鏡音君がわたしに声をかけた。

「何？」

「初音さんって、ホラー苦手だったりする？」

「……そう言えば、わたし時々ミクちゃんと映画見るのだけど、ホ

ラーは一緒に見たことがないわ。わたし、ホラー映画って見たの、これが初めて」

ミクちゃんは相変わらず叫びながら、ミクオ君の首を絞めている。ミクオ君、顔の色が変わってきているような……。

「初音さん初音さん」

見かねたのか、鏡音君が立ち上がって、ミクちゃんの肩をばんぽんと叩いた。

「それくらいで勘弁してあげて。クオ、白目むいてる」

ミクちゃんは我に返ったのか、ミクオ君の首を絞める手を放した。ミクオ君の頭がソファの腕木にぶつかって、鈍い音を立てる。でも、ミクオ君は動かない。

「きゃゝっ、クオ、しっかりしてっ！」

ミクちゃんは今度はミクオ君を揺さぶり始めた。その度にミクオ君の頭が腕木にぶつかってるとるんだけど……。

「ねえ、ミクちゃん……そっとしておいてあげた方がいいんじゃないの？」

「リンちゃんっ！ クオが起きないっ！ どうしようっ！」

ミクちゃんはミクオ君を離すと、わたしにしがみついてきた。また鈍い音が……。

「えっと……多分大丈夫よ」

わたしはミクちゃんの頭をそつと撫でた。鏡音君がミクオ君の近くにしゃがみこみ、軽く頬を叩く。

「おゝい、クオ。生きてるか？」

「う……」

ミクオ君は首をさすりながら起き上がった。良かった、無事だったみたい。

「ほら、ミクちゃん。ミクオ君は大丈夫だったから」

「悪いが……全然大丈夫じゃねえ……ミク……俺を殺す気が……」
ぜいぜいと荒い息をしながら、ミクオ君はそう言った。

「クオ、良かった！ 生きてたのね！」

ミクちゃんは、今度はミクオ君に抱きついた。

「誰の……せいで……死にかけたと……」

「あーん、クオ！ ごめんなさいっ！ わたしがやりすぎたわ！」

ミクちゃんも反省はしているらしい。ミクオ君の方も、それ以上追求する気は無くしたようだ。

「で、映画はどうする？」

「ホラーは嫌よっ！」

鏡音君の質問に、ミクちゃんが叫ぶ。

「じゃあ、初音さんが見たい映画を見るということで。それでいい？」

鏡音君がわたしの方を見たので、わたしは頷いた。ミクオ君も「もうそれでいいよ……」と、投げやりに言う。

「じゃあわたしのお薦め映画を……」

ミクちゃんが立ち上がって、DVDをプレイヤーにセットする。

そうして、邪魔ばかり入った映画上映会は、再開したのだった。

まるでもの凄い鍛冶屋の中に（後書き）

もちろん、前半のクオとミクは本気で喧嘩しているわけではあり
ません。

後半は本気、ですけどね。クオごめんよ。

クオの受難

ミクが立てた「レンと巡音さんをくつつけよう大作戦」というのは、二人を同時にミクの家呼び出して、話す機会を作ってあげよう、というものだった。

「そんなんでうまく行くのか？」

「絶対うまくいくわよ！」

俺にはちつともうまくいくとは思えないんだが、協力を約束した手前、仕方が無い。

というわけで、俺は休日、「一緒に映画見ようぜ」とレンを呼び出した。レンは「映画なら映画館で面白そうな新作やってるからそっちに行こう」と言い出したが、俺がレンが以前から見たがっていた少し古いホラー映画のDVDを入手したと言つと、こっちに来る気になった。つーかこれ、この口実作るためにわざわざネットで買ったんだよな。買つといて正解だった。

……はあ、俺、何やってんだ？　なんで彼女もないのに、他人の色恋沙汰（つていうか、色恋沙汰ですらないぞ）に首を突っ込まなくちゃならないんだ。ああもう、ミクの奴！

俺がレンを連れてホームシアタールームに入ると、ミクと巡音さんはもう来ていた。予定どおり、俺とミクはどっちがホームシアターを使うかで喧嘩を始める。レンも巡音さんも嘖然としてこっちを見ていたが、仕方がない。

話をつける、という名目で、部屋を後にする。そして俺とミクはとりあえず、ミクの部屋に移動した。ミクいわく「二人つきりにしてあげれば、何かしら話すはず！」とのことだからだ。まあ、確かに話ぐらいはするだろう。その中身までは保証しないけど。

「ところで、第一段階（二人を呼び出して、二人つきりにする）はうまくいったけど、この後はどうするんだ？」

「適当なところで部屋に戻って、四人で映画を見ましょう。何も見

ないと変だと思われるし。うまくいけばこれで更に親密度がアップするはずよ」

現実にはゲームじゃないんだがなあ。映画を見ようって意見に異論はないけど。

「ミク、映画は何を見るつもりなんだ？」

「ラブコメよ。とびきりキュートな奴」

うへえ。俺、はつきり言って恋愛映画って嫌いなんだよな。あれのどこが面白いのか教えてほしいぐらいだ。

「先に俺が選んだ奴見てもいいか？」

「何？」

「ホラー映画」

ミクが顔をしかめた。

「わたしがホラー嫌いって知ってるでしょ？」

知ってるよ。でも、俺だってお前の恋愛映画につきあわされるんだから、お前もこっちにつきあうぐらいのことはしろ。

「おい、ミク。お前、二人の仲を取り持ちたいんだろ。だったらホラーを見せた方がいい」

「どうして？」

「うまくいけば、巡音さんが怖がってレンに抱きつくかもしれないぞ」

俺がそう言うと、ミクは思案する表情になった。

「うーん、でも……」

「ミク、アメリカじゃホラーはデートムービーの定番だ。きゃーっ怖いって抱きつかれたら、どんな男だって悪い気はしないっ！」

男の方が先に抱きつくともうド激減だけど、レンの奴はホラー好きだから大丈夫だろう。

「絶対ホラーの方が盛り上がるって！俺を信用しろ！」

「うーん、なら、いいけど……」

よっしゃっ！

「ミク、お前も映画が始まったら俺に抱きつけ」

「なんでそうなるのよ？」

「巡音さんがお前に抱きついたら困るだろ。先にお前が俺に抱きついておけばそれを防げるじゃないか」

「……………」

いてて。ミク、俺をつねることはないだろ。

ホームシアターの設置してある部屋に戻ってみると、レンと巡音さんは気まずそうな表情で、無言でソファに座っていた。どう考えても計画は失敗しているとは思えないんだが、ミクは認めないだろうなあ。

そして、俺が持ってきたゾンビもののホラー映画を鑑賞し始めたわけだが、映画が開始してそんなに経ってないのに、ミクがキレて俺の首を絞めたため、ホラー映画鑑賞はそこまでになってしまった。うう、首がまだ痛いぜ……ミクの奴なんであんなにバカ力なんだ。

ミクが「もうホラーは嫌だ」と強く主張したため、残りの時間はミクお薦めのラブコメ映画とやらをひたすら見る羽目になってしまった。たく、何の苦行だよ、これは。

映画を一本見てから昼食を持ってきたもらい、それからもう一本映画を見てお茶を飲むと、巡音さんは「門限があるから」と言って帰ってしまった。今回の結果にミクは不満そうだが、仕方がないだろ。ああ、後でどうやってなだめよう。いや、それよりもこんなバカな計画、諦めさせる方が先か。

巡音さんが帰ると同時にミクは部屋に引き上げてしまい、ホームシアタールームに残っているのは俺とレンだけだ。

「俺もそろそろ帰るけど、クオ、ちよつといいか？」

「なんだよ」

「今日見れなかったホラー映画、借してくれ」

「ああ、別にいいぜ。今日は悪かったな。ミクと鉢合わせしちまっ

たせいで、お前まで恋愛映画につきあわせちまって」

不意に、レンは俺を真面目な表情でじーっと見た。

「……なんだよ」

「訊きたいことがあるんだ。クオ、お前、俺に何か隠してないか？」

……げっ。いきなり何を言い出すんだこいつは。

「……な、何だよいきなり。そ、そんなことないだろ」

俺がそう言うのと、レンは大げさにため息をついた。

「お前さあ、その態度だけで『はい、俺は何か隠してます』ってバ
レてるよ？」

うるさいっ！

「そもそも、昨日の時点で変だと思ったんだよ。お前、自分の家——
ってか、初音さんの家か——に人呼びたがらないだろ。なのに今
回に限ってはやけにしつこかったし。何がしたかったんだ」

「別に深い意図はねえよ」

レンはもう一度俺をじーっと見て、またため息をついた。

「クオ。正直に全部喋らないと、この前の合宿でのこと、初音さん
に話すぞ」

「レン、あのことは他の奴には言うなって言っただろ！」

「うん、だから、黙っててやるから、隠し事があるんならここで全
部白状しろ」

くそう……これは脅迫じゃないか。俺はどうしたらいいんだ？

例の件をミクに話されるのは絶対嫌だ。かといって、ミクと立てた
「レンと巡音さんをくつつけよう大作戦」のことを話すのはレンの
反応が怖い。それに、喋ったことがミクにバレたら、確実にミクが
……。

背筋を冷や汗がだらだらと流れる。なんで十七の若い身空でこん
な思いしなくちゃならないんだ。……俺が一体何をしたって言うん
だっ！

「で、クオ、どうするんだ？」

……俺は必死で、レンが納得してくれそうな言い訳を探した。

「えーっと……誰にも、特に、ミクと巡音さんには絶対に言うなよ？」

「わかったからとつと喋れ」

「ミクと一緒にホラー映画を見たかったんだ」

「……なんだよそれ」

「最後まで聞いてくれよ。ミクはホラー映画が嫌い、俺がホラーを鑑賞してる時は絶対よりつかない。そんなミクと一緒にホラーを見るにはどうしたらいいか！」

「こっちを見るレンの視線が俺に突き刺さる。きっと今「こいつはアホか」と思ってるに違いない。」

「それで初音さんの予定を調べて、わざわざ巡音さんが来る日を選んで、俺を呼んだわけ？」

「だって一人だと逃げられるだろ。誰かいたら逃げづらいじゃないか」

レンの視線がますます冷たい。

「うまくすれば、ミクがきゃーって叫んで俺に抱きついてくれるかもって、思ってたんだよ……悪かったな」

「……良かったな、夢が叶って」

そんな呆れた声で言うことないだろ、お前はっ！

「ホラーが嫌いという人にホラーを見せるのは、はっきり言って悪趣味だよ」

わかってますよ。っていうか、予定なら巡音さんがお前に抱きつくはずだったのに。なんでこうなったんだ。あつちは全然怖がってなかったし。

「せめてもうちょっと大人しいのにできなかったのか？」

大人しいホラーなんてホラーじゃねえ。

「ゾンビはホラーの王道だろ。お前だってゾンビ映画好きじゃねえか」

「ホラー苦手な人と一緒に見たいとは思わない」
ぐっ。反論できない。

「もう二度としねえよ。さすがの俺も懲りた。たく、巡音さんぐらいミクも落ち着いてくれりゃいいのに……」

「あれは落ち着いてたんじゃなくて、初音さんが騒ぐから画面に集中できなかったんだと思う」

「さいですか。っていうか、お前、あの状況で巡音さんのことまで見てたのか。」

「お前、巡音さんのことどう思う?」

「何だよ藪から棒に」

「いいから答えてくれ」

もしレンがきつぱり「好みじゃない」って言ったら、それを口実にミクを止められるかも。

「クオは、巡音さんのことどれくらい知ってる?」

おい、質問したのは俺だぞ。

「あんまり知らん。ミクとは仲いいけど、俺はほとんど話したことないし」

「巡音さんの口ぶりだと、よく遊びに来てるみたいだったけど。それで全然話す機会ないわけ?」

多少の話はしたらしい。

「だって俺あの子に用事ないし、たまに話しかけても黙り込んで、結局はミクが代わりに話すし。ミクも何だか俺に冷たいし。」

で、お前は巡音さんのことどう思うわけ? まだ質問に答えてもらってないぞ」

「ごめんもう一つだけ教えてくれ。初音さんの方が、巡音さんの家に遊びに行くことは?」

「ねえよ」

いつも遊びに来るのは巡音さんの方だ。

「で、お前いい加減に俺の方の質問にも答えるよ」

「何だったわけ?」

おい。いくら温厚な俺でも怒るぞ。

「巡音さんのことどう思うのかって、さっきから何度も訊いてるだ

る」

「お前は俺にそれ訊いてどうしたいわけ？」

「レン！ 質問に質問で返すなよ！」

「だってお前の意図がわからないし」

「ああもつつ！」

基本的にはいい奴だけど、時々こういうよくわからない理屈使うんだよな。

「……お前の気持ちもわかんなくはないけど、そういうのはよくないと思うぞ」

「は？」

「じゃ、俺は帰るよ。あ、クオ。DVD」

俺はDVDをレンに渡した。さーて、後はミクか。多分機嫌悪いだろうなあ……。つかレン、お前結局肝心なこと返事してねえじやねえか。

クオの受難（後書き）

（おまけ 没にした会話）

「せめてもうちょつと大人しいのにできなかったのか？」

「例えば？」

「『血の祝祭日』とか」

「血ドバドバのスプラッタ映画じゃねえかそれ！ どこが大人しいんだ」

「だってあの映画、低予算な上に素人だらけだから、画面がめちゃくちゃチープだろ。それにあのなんとも言えないしょぼいBGMを聞くと、むしろ笑いがこみ上げてくるんだけど」

「そりゃそうだが……ミクにやわからないだろうし、見たら確実にぶっ倒れる」

「じゃあ『エス』」

「見た奴が鬱になるって有名な映画だろ！ 全然大人しくねえよ」

「実際の事件がベースだから説得力あるかと思ったんだけどなあ」

「ありすぎて逆に怖いんだよ！ 俺も普通のホラーなら好きだけどああいうのはパス！」

「じゃ『ピアニスト』」

「それホラーじゃねえじゃん！ 主人公が変態っただけで！ ミクと一緒に見たら間違いなく俺が誤解され……レン、お前、俺をからかってるだろ」

「あ……バレたか」

最後のは見せたら、リンが確実に失神するな……。つーかどれも高校生が見る映画じゃないし、こんなの日常的に見てたらレンとクオが単なる変人になってしまう。……という理由で没にしたんです。

あ、『ピアニスト』は真面目な映画です。カンヌで賞貰ってます

し、原作者はノーベル賞取ってるし。でも、主人公はどう見ても頭がおかしい。一応下調べして、覚悟はして見ていたんですが、自傷のシーンなんて見た時、冗談抜きで叫びたくなりました。

ガラスの覆い

あれこれあつた上映会から帰ると、玄関の前に見覚えのある高級車が止まっていた。……神威さんが来てるのね。

家の中に入ると、応接室の方からお父さんの機嫌の良さそうな声と、それに相槌を打っている神威さんの声が聞こえてきた。神威さんは、ルカ姉さんの婚約者。お見合いをしたのは二年前。話はあつという間にまとまり、一ヶ月ぐらいで二人は婚約した。我が家は娘しかいないから、神威さんは婿養子に入ることになっている。お父さんとしては、すぐにでも式をあげさせたかったみたいだけれど、神威さんが「若輩者なので結婚はもう少し待ってほしい」と言いだしたので、二人はまだ婚約者のままだ。

でも、そんなにしないうちに結婚するんだろうな。ルカ姉さんと神威さん。

わたしもいずれ、ルカ姉さんみたいに、お父さんが連れてきた人と結婚するんだろうか。……なんだか、胸の中がもやもやする。わたしはため息を一つついて階段をあがると、ハク姉さんの部屋へと向かった。ドアを叩く。

「……誰？」

「リンよ」

答えると、ハク姉さんの驚いた声が返ってきた。

「あんたどうしたのよ？ お父さん、今日は家にいるんでしょ？」

「……まあいいわ」

鍵が開く音がして、ドアが開いた。わたしはそつと部屋の中に入った。

「あれ、リン。出かけてたの？」

外出着のままのわたしを見て、ハク姉さんはそう訊いてきた。

「うん。ミクちゃんの家に行っていた」

「ふーん……楽しかった？」

「色々ありすぎてよくわからない」

ミクちゃんだけじゃなくて、ミクオ君と鏡音君がいて。ミクちゃんとミクオ君が喧嘩して、わたしは鏡音君と二人きりで部屋に残されて、二人で気まずい時間を過ごして。ミクちゃんが戻って来てからは、ミクオ君の選んだホラー映画のせいで、ミクちゃんがミクオ君の首を絞めちゃった。幸い、ミクオ君は無事だったけど……。その後は、ミクちゃんの好きな映画を見て、ミクちゃんはとても楽しそうだった。それからみなでお昼ご飯を食べて、もう一本映画を見て、で、お母さんが持たせてくれたケーキでお茶にして。ミクちゃんが「リンちゃんのお母さんって、本当にケーキ焼くの上手ね」って、言ってくれたんだっけ。

「何よそれ」

「そうとしか言いようがなくて……」

この前の椅子は、幸いそのままだった。わたしはそこに座る。ハク姉さんはベッドに腰かけた。その脇に、開きっぱなしの本が伏せてある。わたしが部屋に来るまでは、本を読んでいたらしい。

「ハク姉さん、何読んでたの？」

「ちよつと前の外国の小説」

「どんな話？」

「悲恋物。つまんない。……なんであたし、こんなの読んでるんだか。で、用件は？」

「特にないんだけど……ちよつとだけ、ここにいてもいい？」

「ちらかってるのが気にならないんならね」

わたしは頷いた。内心、ちよつとは片付けた方がいいんじゃないかとは思っけれど……言ったらハク姉さんは怒るだろう。わたしは、しばらくそのまま椅子に座っていた。

「……リン、何か嫌なことでもあった？」

「……別に」

ハク姉さんは大きなため息をついて、わたしを見た。

「気になってることがあるんなら言いなさいよ」

「下に神威さんが来てる」

「神威……ああ、姉さんの婚約者ね。……なら、お父さんは当分神威さんの相手をしてるか」

ハク姉さんは天井を見上げて、子供みたいに足を揺すった。

「ルカ姉さん、神威さんと結婚するのかな」

「するんじゃない？ 姉さんだもの」

「ルカ姉さんは、それでいいって思ってるのかな？」

「思ってるんじゃない？ そういう人よ」

「……どうして、なんだろう。」

「……ハク姉さんだったら結婚する？」

「さあ？ あたしは失敗作だからね。あたしの意見なんか参考にならないわ」

わたしの質問に、ハク姉さんは自嘲気にそう答えた。

「そういう言い方は止めてよ」

「事實は事實よ。姉さんは成功作で、あたしは失敗作」

「……わたしは何も言えなかった。」

お父さんは、多分、そう思っている。ルカ姉さんは成功作で、ハク姉さんは失敗作だって。

じゃあ、わたしは、何なんだろう……。

「……リン？」

気がつくと、ハク姉さんが心配そうにこっちを見ていた。

「あんた平気？」

「……わからない」

息をするのが苦しい。そう思う、時がある。

空がわたしにのしかかってくる。昔読んだ本の中のそんなフレーズを、わたし何故か思い出していた。

ガラスの覆い（後書き）

色々と話の設定を考えているうちに、この家庭環境でルカさんがフリーなのはちよつとおかしいのではないかと思ったので、急遽婚約者を設定しました。相手はがくぽです。……ごめんがくぽ。

後、多分、下の名前はさすがに「がくぽ」ではないと思います。だって……ねえ。

ところで、この作品には、実はレンとミクの視点のバージョンが存在します。もともとは頭の中を整理するために書いていたんですが、割とまとまっているので、これはこれで読めるんですが。これも掲載していった方がいいのかなあ……。

わたしが街を歩くと

登校して、ミクちゃんとお喋りして、授業を受ける。授業が終わったら、部活のある日は部活動。それが無い場合、大抵は真っ直ぐ家に帰る。帰宅後は家庭教師の先生について勉強。それが、わたしの日常。何事もなく、日は過ぎていく。

そんな、ある日の放課後。授業が終わって帰り支度をしていると、携帯にメールが届いた。差出人は運転手さん。「まことに申し訳ありませんが、車に問題がありました。お迎えに行くのが遅くなります」と書かれている。今日は部活も無いし、ミクちゃんはミクオ君と約束があるとかで行っちゃったし……。どうしよう。

ちよつと考えた結果、わたしは図書室に寄って行くことにした。あそこなら簡単に時間が潰せる。書棚に向かうと、わたしはざっと見回して、手ごろな本を探した。どれにしようかな。……これでもいいか。

近くにあった一冊を手にとって、わたしは閲覧席の方へと向かった。……あれ。

鏡音君がいる。イヤフォンをつけて、何か……プリントの束かな？ そんなものをじっと見ながら、ノートに何か書いている。

立ったまま、わたしはなんとなく鏡音君を見ていた。なんだか、最近しょっちゅう顔をあわせている気がする。勉強中なら、邪魔したら悪いかな。そう思った時、鏡音君が顔をあげた。……目があっちゃった。

どうしよう……。でも、無視するのも変な気がする。わたしは本を抱えたまま、鏡音君の座っている席の方へ歩いて行った。図書室の勉強用の机は四人がけだけど、鏡音君は一人で座っているの、他の三つは空いている。

「ここ……空いてる？」

鏡音君が頷いたので、わたしは向かいの席に座った。持ってきた

本を開いて読み始める。

「何読んでるの？」

不意に、鏡音君がそう訊いてきた。もちろん、図書室だから声は小さい。わたしは本を立てて、鏡音君に表紙が見えるようにした。

「どういう話？」

「……さあ。まだ読み始めたばかりだから」

そもそも適当に持ってきた本なので、あまり中身のことは気にしていない。時間が潰せればいいのだし。

わたしは読書に戻ろうとしたのだけれど、どうも集中できない。さつきは向こうが声をかけてきたわけだし、ちよつとくらいなら、こつちが話しても大丈夫かな。

「鏡音君は、勉強？」

「いや、これはただの趣味」

鏡音君がプリントの束を見せてくれた。英文がびっしり書いてある。……詩みたい。

「詩？」

「歌の歌詞。これのね」

鏡音君は、ポケットから携帯プレーヤーを取り出した。さつきからイヤフォンで聞いていたのはそれだったみたい。

「聞いてみる？」

わたしはどうしようか考える。断るのも悪い気がしたので、頷いた。鏡音君がイヤフォンを渡してくれたので、それを耳に差す。鏡音君が手元のプレーヤーのボタンを押した。

「……ひゃっ！」

いきなり激しい音が鳴ったので、わたしはびっくりして声をあげてしまった。……何なのこれ？ わたしはそのまま、鏡音君が停止ボタンを押して音楽を止めるまで、固まってしまっていた。

「……大丈夫？」

気を使わせないわけじゃないのに。……どうして、こうなんだろう。

「ごめんなさい。こういうの初めて聞いたから、驚いちゃって」

わたしがそう言つと、鏡音君は怪訝そうな表情になった。

「巡音さんは、普段はどんな音楽を聞いているの？」

「クラシックだけど」

もつと小さい頃は童謡とかも聞いていたけれど、中学に入った頃からはクラシックしか聞いていない。

「クラシックが好きなんだ」

「……多分」

他に選択肢はないというのもあるけれど……でも……多分、嫌いではない、と思う。

「じゃ、ちよつとこれ、聞いてみってくれる？」

不意に鏡音君がそう言った。正直言つとあまり気は進まなかったけれど、もう一度イヤフォンを耳に差す。鏡音君がプレーヤーの再生ボタンを押して、また、音楽が始まった。

……さっきのとは違う曲だ。ゆっくりした曲調で、ずっと聞きやすい。歌っているのは男の人。残念ながら、部分部分の単語は聞き取れても、何を言っているのかまではわからない。あれ……？ この旋律、どこかで聞いたことがあるような……？ え？ あれ？

「なんでミミの名を呼ぶの？ ムゼッタのワルツでしょ？」

プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』は、貧乏暮らしの若い芸術家たちを描いた作品で、ミミとムゼッタはこのオペラの登場人物だ。「ムゼッタのワルツ」は『ラ・ボエーム』で歌われるアリアで、タイトル通りにムゼッタが歌う。今の曲で途中から使われていたフレーズ、あれはかなり感じが変わっていたけれど、「ムゼッタのワルツ」に違いない。でもそれならどうして、ムゼッタではなく、ミミの名を呼んでいたんだろう？

「あ……やっぱりわかるんだ」

そう言つて鏡音君は、プレーヤーを止めた。

「……かなり感じが変わっていたから、名前が出てくるまでは自信がなかったんだけど」

あの「ミミ」と名前を呼ぶ声で気がついた。これは「ムゼッタのワルツ」だって。

「作中でもそう言われるけどね。『それじゃムゼッタのワルツだってわからないよ』って」

……どういうことだろう？

「これ『RENT』っていうミュージカルの曲なんだよ。『ラ・ボエーム』を現代に翻案した作品。ちなみに、前に巡音さんと劇場で会った時に見てたのもこれなんだけど。で、今は主人公のロジャーが、最後の方でミミに歌う曲」

「ロジャー……ロドルフォのこと？」

詩人のロドルフォは、『ラ・ボエーム』の主人公で、ミミは彼の恋人だ。二人は愛し合うのだけれど、貧しさが若い恋人たちを引き裂いてしまう。そして、ミミは最後は結核で死んでしまうのだ。

「そうだよ」

「どうしてロドルフォがムゼッタのワルツを歌うの？」

「さあ……何でだろう？ でも、三回ぐらいこのフレーズ弾いてるよ」

鏡音君にもわからないらしい。それにしても、ロドルフォがこの歌を歌うのだろうか？ あんまり想像したくないかもしれない。

「ロドルフォが、『わたしが街を歩くと、誰もが立ち止まって、わたしの美しさに見とれるの』って歌うの？」

わたしがそう言ったら、鏡音君は笑い出した。

「……さすがにそれはないよ。あくまでギターで弾いてるだけ。その台詞自体は別の曲にあわせて、ムゼッタに当たるキャラクターが歌ってるけどね」

ちよつとほつとした。

「この曲の歌詞自体は『君こそが探し求めていた歌なんだ』とか、そんな感じ」

「その台詞、『ラ・ボエーム』にも似たのがあるわ。『詩をみつけたんだね』ってみんなが言うの」

第一幕の最後の方で、ロドルフォの芸術家仲間であるマルチェロやコツリーネやショナールは、ロドルフォとミミが一緒にいるのを見て、そんなことを言う。

「へえ……『ラ・ボエーム』は見たことがないからなあ。一度見てみたいとは思ってるけど」

鏡音君がそう言った時だった。鞆の中に入れておいた携帯が振動し始めた。

「あ、ごめんなさい。携帯に着信入ったみたい」

わたしは携帯を取り出して中を確認する。運転手さんから、迎えに来たとのことだった。あ……じゃあ……帰らなくちゃ。

「誰から？」

「運転手さん。今日は車の調子が悪いから少し遅れるって、少し前に連絡があつたの。で、今、迎えに来たって」

なんだか少し淋しい気がする。わたしは鏡音君にさようならを言っ
て、本を書棚に戻し、帰宅の途についた。

わたしが街を歩くと（後書き）

このネタをやりたいばかりに、冒頭でレンが見ているミュージカルを『RENT』に設定しました。実はプロットを考えた時は、『ウエストサイドストーリー』だったのです。ただこれだと、共通する楽曲がない！ というわけでこういうことに。

まあ一発で聞いてもわからないような気がするんですが……。情けない話ですが、私は何度も巻き戻して聞きなおして、やっと「あ、同じ曲だ」と理解できました。

ラ・ボエーム「ムゼッタのワルツ」

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=sdnHvxmo2N0>

（演奏会形式、日本語字幕あり）

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=znLx0zds0dQ>

（舞台版。2008年度メトロポリタンのもの。字幕無し。珍しくムゼッタがちゃんと美人）

RENT「Your Eyes」

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=8eKiJfUYtS4>

（1:50辺りで流れ出すメロディーが、「ムゼッタのワルツ」）

おまけに、レンが最初に聞かせた曲はこれ。

『RENT』より「RENT」

↓ <http://www.youtube.com/watch?v=ffBe4bYLd91k&feature=rela>

t
e
d

作戦会議中のクオ

俺は、喫茶店でミクと向かい合っていた。言わずもがな、ミクに「作戦会議よ！」と引つ張り出されたわけなんだが。というか、何で喫茶店なんだ？

ちなみに、作戦というのは言わずもがな、この前失敗した「レンと巡音さんをくつつけよう作戦」のことである。理由はさっぱりわからないが、ミクは未だに燃えているのだ。

「とにかく、どうにかしてもう一回呼び出したいの。クオ、何かいい案ない？」

……思わず深いため息が出る。どうしてミクは諦めてくれないんだ。

「なあ、ミク……もう止めようぜ、こんなこと」

ミクはふるふるとかぶりを振った。二つに束ねた髪が一緒に揺れる。はあ……見た目やしぐさは滅茶苦茶可愛いのに、なんで中身はこつぱつ飛んでるんだ。

「絶対に嫌」

なんでこいつはこんなに意地になってるんだ？ えーと、じゃあ、別の方面から攻めてみるか。

「そもそもレンの奴をお前んちに呼ぶのに無理があるんだよ」

「だって、クオと鏡音君は友達でしょ？ 友達の家に遊びに行くのって当たり前のことよね。クオはよく鏡音君の家に遊びに行くじゃない」

「だからさあ、お前んちはお前んちであって、俺んちじゃないの」「今はクオの家よ」

いや、さすがにそれはちよつとなあ。ミクの家には中三の時から厄介になってるけど、俺は未だにお客さんみたいな気分にいる。あ、別に邪険にされてるわけじゃないぞ。俺はミクと同じ広さの一人部屋（俺の実家の部屋の倍ぐらいある）使わせてもらってるし、食事

もミクと完全に同じメニュー（しかも量は俺の方が多い……ミクと同じ量じゃ少ないだろうって）だし、小遣いまでミクと同額（これまた、実家でもらってた額よりもずっと多い……）だったりするし、ミクが何か（服とか、学用品とか）を買ってもらう時は、同じランクのものを買ってもらえたりするが、そこまでされると、なんていうか……逆に申し訳ない気がするんだよな。そんなにしてもらっていいんだろって。

「レンに怪しまれたんだよ」

仕方がないのでそう言ってみる。

「怪しまれたって？」

「この前、なんでいきなり自分を家に呼んだのかって、しつこく訊かれた。何か魂胆があるんじゃないかって。考えてもみるよ、レンと知り合って一年半なのに、俺があいつをお前んちに呼んだの、この前が初めてなんだぜ」

ミクは、半眼でじーっと俺を睨んだ。怖いのでやめてほしい。

「クオ、まさかとは思っけど」

「誓って計画のことは喋ってない。適当にごまかしておいた」

ミクがふうつと息を吐く。ごまかしの内容を訊いてきたりしませんように。さすがに何重もの嘘をつくのはしんどい。幸い、ミクはその辺りを訊いてはこなかった。次の「作戦」とやらで頭がいっぱいらしい。

「そろそろハロウィンだし、パーティーをするってのはどう？」

「断言するが、そんな口実じゃ怪しまれるだけだし、あいつは来ない」

そもそもそのイベント、全然定着してないじゃないか。毎年商戦だけが異常に活発なだけで。

「うーん……わたしの家に呼ぶのが難しいとなると……あ、そうだな。みんなでどこかに遊びに行かない？」

ちよつと楽しそうかもな……はっ、いかんいかん。ミクに乗せられてる。

「行くつてどこへ？」

「リンちゃんは門限があるし——あそこのお父さん、門限にはすぐうるさいのよ——近場じゃないと無理だけど」

ミク、お前と俺も門限あるの、忘れてないか？ 巡音さんのところよりは遅い時間だし、連絡さえしつかり取っておけば、伯父さん伯母さんはそこまで心配しないけど。

「ゲーセンとか？」

呼び出す理由としてはこれが一番楽だろうなあ。ミクはあんまりゲーセンには行かないから、社会見学として連れて来たと言えば、あいつも怪しまないだろう。巡音さんは更におまけということでは……。

「リンちゃんをゲームセンターに誘うのは無理だと思う。ゲームやらないもの」

「じゃ、カラオケは？」

これまた社会見学という理由でなら（以下略）

「それも厳しいと思う。リンちゃん、クラシックしか聞かないから巡音さんって、普段どういう生活送ってるんだ？」

「あんまり変なところだと、レンを引っ張り出すのが難しくなるぞ」俺がレンと遊びに行く場合、行き先は映画館かゲーセンだ。映画は好みがバラバラすぎて難しいし——正直、恋愛映画はもうたくさんだ——、ゲーセンはさっきの理由で駄目、となると……。

「……遊園地なんてどう？」

俺が考え込んでいると、ミクがそう言ってきた。

「遊園地か……」

ここしばらく行ってねえな。そもそも、男二人で遊びに行くような場所じゃあないし。けど、男女混合四人連れで行くんならいいか「それならいけるかも」

俺がそう言うと、ミクは嬉しそうな顔になった。

「でしょでしょ」

得意げだな。「褒めて褒めて」と言わんばかりだ。まあ、可愛い

から許そう。

「で、いつにする？」

「リンちゃんはまだ足の怪我が治ってないから、足が治ったら誘ってみる」

あゝ、そういや、二週間ほど前に捻挫したとか言ってたな。この前ミクの家に来た時も足を引きずっていたっけ。そうなると来月か？ まあ、ミクに連日せっつかれないんだからよしとしよう。レンを引っ張り出す口実も、考えとかなきゃな。

作戦会議中のクオ（後書き）

前回のエピソードでリンが言っていた「ミクの用事」っていうのは、これです。

そんなわけで次の作戦は遊園地作戦に決定したわけですが……これは書いている私は、出不精であの手このところ、もう年単位で行ってないんですよ。ちゃんと書けるんだろっか……。

ロウソクに火をください

帰宅すると、家庭教師の先生はもう来ていた。制服を脱いで私服に着替え、勉強道具を持って学習室に移動する。

学習室はそこその広さがある。何年か前までは、姉妹三人でここで揃って勉強していた。今は、ここで勉強するのはわたし一人だけ。ルカ姉さんはもう社会人だし、ハク姉さんは部屋から出てこない。

……だからどうというわけではないけれど。

ルカ姉さんが神威さんと結婚したら、いずれはわたしの甥か姪が産まれる。そうしたら、この部屋を使うことになるのかな。そして、その子も……。

無意識に鉛筆を噛んでしまい、家庭教師の先生に注意される。いけない、集中しなくちゃ。わたしは、目の前の英文に意識を戻した。例文は、インターネットに関するエッセイだ。ネットの公平性とオープン性について書かれている。わたしはパソコンを持っていないし——お父さんに、高校生の間は駄目だと言われている——携帯も厳しく制限されているから、ネットを自由に閲覧するというわけにはいかない。もっとも、文章はそういうことについては書かれてないんだけど。

何をやっているんだろう。これは単なる課題なのだから、問題を解くことだけに集中していればいいのであって、文章の意味するところなんか気にしても仕方がないのに。わたしは雑念を追い払うと、目の前の問題に集中しようと努めた。

勉強が終わると、夕食の時間だ。最近はお母さんと二人のことが多い。お父さんは仕事で忙しいし、ルカ姉さんもそう。ハク姉さんは、やっぱり部屋から出てこない。冷蔵庫に食べられるものはいつも入れているので、皆が寝静まっている時間帯に食事をしているみたい。それで大丈夫なのかな……？

今日は珍しく、ルカ姉さんがいて、先に食事を取っていた。背筋が真っ直ぐ伸びていて、その作法には全く乱れというものがない。……いつもこうだけど。わたしは自分の席に着いて、手をあわせ、食事を始めた。

「リン、学校はどう？」

食事をしていると、お母さんがそう訊いてきた。

「……普通」

別に何も無い。強いて言うなら鏡音君と喋ったことぐらいだけれど、これを言っちゃうと後が怖いし……。

「楽しい？」

「……多分」

ミクちゃんがいるから。

「ならいいのだけれど。足は？」

「もうしばらく固定してないと駄目だって」

「無理はしないのよ」

「ええ」

体育は見学しているし、部活は英会話だから動くような部活じゃない。早く治らないかな。やっぱり何かと不自由だ。

わたしが食事をしながらあれこれ考えていると、ルカ姉さんが立ち上がった。いつの間にか、食べ終わってたみたい。

「ごちそうさま。先にお風呂入ってもいいかしら？」

「リン、それでいい？」

「お先にどうぞ、ルカ姉さん」

「では、お先に」

ルカ姉さんは一つ頷いて、すたすたと食堂を出て行ってしまった。ルカ姉さんの動きには無駄というものがない。昔から、ルカ姉さんはあんな風だった。

食事をして、お風呂に入って、自分の部屋に戻る。何か音楽でも

聞こうかな……。わたしはCDが並べてある棚の前に立った。ラフマニノフとリストのCDを取り出す。どっちにしよう。……。あ、そういえば。

CDが並んでいる段の下には、DVDが並べてある。ほとんどがオペラとバレエのそれだ。わたしは一度手にしたCDを脇に置いて、一枚のDVDを手についた。プッチーニのオペラ『ラ・ボエーム』。確か、見てみたいって、言ってたわよね。貸してあげたら、喜ぶかも……。

でも……。いきなり渡されたら、迷惑かな……。えーと……。

わたしは悩んだあげく、『ラ・ボエーム』のDVDを綺麗な紙袋に入れて、通学鞆の中に入れた。

その次の日。登校したわたしは、早速頭を抱えていた。DVDを持ってきたのはいいけれど、どうやって声をかけたらいいのかわからない。いきなり「これ、貸してあげる」じゃ、唐突よね。じゃあ、どう言ったらいいんだろう？

鏡音君はもう登校してきていて、自分の席でノートを広げて何か書いている。声をかけるのなら早くしないと、先生が来てしまう。でも、どうやって？

わたしが悩んでいると「おはようっ！」という、明るい声が飛んできた。ミクちゃんだ。

「おはよう、ミクちゃん」

ミクちゃんに相談してみようかな。……。でも、こういう相談って、どういう風にすればいいの？ 切り出し方がわからない。

「ねえリンちゃん、この前の現国の課題って……」

あ、先にミクちゃんの方が話し始めてしまった。こうなると、ますます切り出しにくい。結局、始業のベルが鳴るまで、わたしはともに何か言うことができなかった。

何事もなく授業は進み、昼休みになった。お昼は大体いつもミクちゃんと一緒。だけど、今日はミクちゃんは委員会のミーティングがあるとかで、四時間目の授業が終わると、あわただしく行ってしまった。そういうわけで、今日の昼食は一人。ミクちゃんがいないと、やっぱり淋しい。

そうだわ、DVDを渡さなくちゃ。見てみると、鏡音君は教室にはいなかった。食堂で食べているのかも。わたしは立ち上がると、DVDを入れた紙袋を手にとって、教室を出た。

食堂に行ってみたけれど、食堂にもいなかった。……お昼休みは半分以上経過しているし、もう食べ終わって教室に戻っちゃったか、他の場所にいるのか……。学校は広いから、他の場所だと探すのは難しい。おとなしく教室で待っていた方が得策かもしれない。

そうは思ったのだけれど、何だかこのまま引き返すのも嫌だったので、わたしは図書室に行ってみることにした。前にあそこで見たからといって、今日もいるとは限らないのだけれど……。あ。

図書室に行く途中の渡り廊下。そこを渡ろうとした時、探していた人の姿が目に入った。校庭に植えられている木の陰で、座って音楽を聞いている。……一人みたい。

わたしは鏡音君に近づいた。気配で気づいたのか、鏡音君が顔をあげて、耳からイヤフォンを外す。

「……巡音さん、俺に何か用？」

そう言われて、わたしは口ごもった。

「あ、えつと……」

向こうは、わたしをじっと見ている。

「それ、昨日と同じ曲？」

「そうだけど」

と、とにかく……用件を話さなくちゃ。わたしは紙袋を、鏡音君に差し出した。

「これ……貸そうと思って。『ラ・ボエーム』のDVDなの」

鏡音君は紙袋を受け取って、中を確認した。

「え……いいの？」

「見たいつて、言つてたから」

「なんで、これだけのことを言うのに、わたしはこんなに苦勞して
いるんだろう。」

「じゃ、遠慮なく貸してもらつよ。……あ、返すの、多分週明けに
なると思うけど、それでもいい？」

「あ……良かった。喜んでくれているみたい。」

「ええ……それじゃあ」

わたしはそう言つて、その場を後にした。

ロウソクに火をください（後書き）

Would you light my candle?

すいせんボエームの方じゃなくて。イタリア語はわからないので歌詞がさっさと出てこない……。まあ、要するに、そういうことです。

嵐

日曜日がやって来た。今日は外出の予定はない。家で本でも読むか、オペラのDVDでも見てようかな……そんなことを考えながら、わたしは階下に降りて行こうとして、凍りついた。食堂から、お父さんとお母さんの話し声が聞こえてくる。ううん、これは、話しているんじゃない。

……喧嘩、しているんだ。

「朝からそんなくだらない話につきあう気はない！」

「くだらないことじゃないわ。ハクがひきこもってもう三年よ。やつぱり一度きちんとしたお医者様に見せるか、カウンセリングでも受けさせた方が」

「そんな恥ずかしい真似ができるか！ 精神科に連れて行くことも、その手の医者家を家に呼ぶことも許さん！」

「だって……！」

「そもそも、お前があの子をちゃんと見てなかったのがいけないんじゃないか！ 全く、なんであんな家の恥になるような娘になったんだか……」

わたしはその場に座り込んだ。……やめて。お願いだからやめて。言い争ったり怒鳴ったりしないで。でも、二人の口論は収まらない。

「あなた、そんな言い方は……」

「実際、恥だろうが！ 全く、誰に似たんだ」

「……ハクだって……」

「ハクのことはもういい。それより、リンはどうなんだ」

突然わたしの名前が出てきたので、わたしははっとなった。

「リン？ あの子は普通にしているわ。ちゃんと学校に行っているし、成績も学年で十番以内に入ってるし、門限だっていつもきちんとして守っているし、問題はないわ」

「……ならいい。リンまで、ハクみたいになったら困るからな。い

いか、目を離すなよ」

「え……でも……」

「とにかく、お前はリンをちゃんと見てろ」

ハク姉さんみたいになつたら困る、か……。お父さんは、わたしを放っておいたら、ハク姉さんみたいになると思っているんだ。でも……。

……頭がくらくらする。わたしは両手で顔を覆った。と、その時。
「リン、何をしているの？」

「ルカ姉さん……」

いつ来たのか、わたしの後ろにルカ姉さんが立っていた。

「……お父さんとお母さんが喧嘩してるみたいなの。ハク姉さんのことで。ルカ姉さん、どうしたらいいの？」

「立ち聞きは感心しないわ」

ルカ姉さんはいつもと変わらない口調でそう言つて、そのまま階段を下りて行つた。

「待つて、ルカ姉さん！」

「私には関係ないことだし」

わたしは半ば呆然として、ルカ姉さんの背を見送つた。どうして平然としていられるんだろ。ルカ姉さんのことがわからない。何だか……怖い。

ルカ姉さんはそのまま、食堂に入つて行つた。お父さんとお母さんの声が止む。しばらくして、お母さんとルカ姉さんが朝食について話し始めた。お父さんの声は聞こえない。

……わたしはのろのろと立ち上がると、自分の部屋へと戻つた。食欲は無くなつていた。

部屋に入ると、わたしは音楽CDを並べてある棚から、シューマンの交響曲のCDを取り出してプレーヤーに入れ、音量を上げた。

……何も考えなくなつたから。

どれくらいの間、そうしていただろう。部屋のドアを叩く音がした。CDを止める。

「……誰？」

「リン、朝ごはんは食べないの？」

お母さんだった。

「食欲無いから、今日はいない」

「成長期の女の子は、きちんと三食取らないとだめよ」

「……とにかく、いない。ほつといて」

ドアの向こうからため息が聞こえた。続いて、廊下を歩いていく音が。わたしは、もう一度CDのスイッチを入れ、ベッドの上に突っ伏して頭から上掛けをかぶった。

嵐（後書き）

今回は短いですが、繋げるとなんだかバランスが悪い気がしたので、独立させました。

ルカさんがこういう態度になった理由は、外伝その一参照、というところで。

冷たくもなく、熱くもない

結局、日曜日は一日ぼんやりとして過ごしてしまった。そして、次の日。月曜になっても、気分は晴れない。

「リン、ちゃんと食べないと駄目よ。昨日もろくに食べてないでしよう?」

お母さんにそう言われたけれど、わたしは食が進まなかった。お父さんがいないのをいいことに、わたしは朝食を半分以上残して、席を立った。通学鞆を持って、家を出て車に乗る。

……考えちゃだめ。考えたらだめ。普通にしていなと。

しばらくすると、学校についた。校門で車から降りて、校舎へと向かう。その時、声をかけてきた人がいた。

「おはよう、巡音さん」

……鏡音君だ。

「あ……おはよう、鏡音君」

普通にしてくなくちゃ。普通に、普通に……。

「週末にあれ見たんだ。巡音さんが貸してくれた『ラ・ボエーム』……そう言えば貸していたつけ。

「そうなんだ……」

「姉貴が暇だったらしくて一緒に見たんだけど、見ていたら姉貴が怒り出しちゃってすごかったよ。『こんのヘタレ男』って、ロドルフォのことを怒鳴りまくっちゃって。うちの姉貴、感情の起伏が激しいもんだから。何もそんなに怒らなくてもいいと思うんだけどさ」

鏡音君にもお姉さんがいるんだ。ルカ姉さんみたいな人でも、ハク姉さんみたいな人でもないみたい。……って、わたし、一体何を考えているんだろう。

「……………」

お父さんはルカ姉さんを成功作だと思っていて、ハク姉さんのことは失敗作だと思っていて。でも……わたしは……。

だから、いらないことは考えないの。考えたら駄目。とにかく駄目。

「巡音さんはどう思う?」

「……お姉さんのこと?」

「そうじゃなくて、『ラ・ボエーム』のこと」

「プッチーニの代表作の一つよね。彼の作品の中では一番ロマンティックと言われている、現代でも人気が高いわ」

確かそうだったはず。

「俺が訊きたいの、そういうのじゃないんだけど」

鏡音君はそんなことを言い出した。もつと専門的なことが知りたいのだろうか。

「だからさあ、巡音さんは『ラ・ボエーム』をどう思っているわけ?」

どうって……。あれはオペラだ。十九世紀のオペラ。プッチーニが作った傑作で。

だから、わたしがどうこう言っているものじゃないの。

「……………」

「何も評論家みたいなこと言わなくてもいいから。『こんな恋愛してみたい』とか『ミミよりムゼッタの方がすてきだと思う』とか、そんな単純なのでいいんだってば。なんならうちの姉貴みたいに『ロドルフォのヘタレ顔を洗って出直してきやがれ』とかでもさ。なんかないの?」

言葉が、周りを舞っているような気がする。わたしには、絶対に捕まえられない。

「別に……………」

「巡音さんには自分の意見ってものがないの?」

鋭い声が飛んできた。思わず顔をあげる。正面から目があった。

自分の意見……………?

「そんなこと……………訊かないでよ……………」

わたしに意見を求めたりしないで。そんなこと訊いてほしくない

の。だって、わたしは……。

「……巡音さん？」

「それに……そんな言い方しないでっ！ 言われても困るの！ わたしは……わたしはっ……！」

気がつくと、わたしは叫んでいた。頭がくらくらし、手足が冷たい。

「ちよつと巡音さん、落ち着いて」

わたしの両肩に、鏡音君の手がかかった。……え？ 今、わたし、何をしたの？

胸の奥がしめつけられるように痛い。痛くて、苦しい。周囲が回っているような気がする。頭上の空がガラスみたいに思える。ああ、あれがきつと落ちてきて、わたしは潰れてしまうんだ。

「ガラスが……」

「巡音さん？ ちよつと、巡音さん！？」

そして、わたしの意識は途切れた。

気がつくと、保健室のベッドの上だった。

「あれ……？」

「あら、気がついたのね」

校医の先生がこっちに近づいてきた。

「二年C組の巡音リンさんね。校門のところで貧血を起こして倒れたとかで、同じクラスの男子生徒があなたを運び込んで来たのよ」

「鏡音君が……？」

「そう言えば、そんな名前だったわね。あなたのことを心配していたわよ」

わたしは、気を失う前のことを思い出した。確か頭の中が真っ白になって、鏡音君の前で大声で叫んでしまったんだ。それも、言っても仕方のないようなことばかり。……どうしよう。

「巡音さん、朝ごはんはちゃんと食べてきたの？」

「……いいえ」

「食事はきちんと取らないと駄目よ。あなたはまだ成長期なんですからね。無理なダイエットなんてしないでいいの」

先生、ダイエットじゃありません。ただ単に食欲が無かったんです。

「それで、今の気分はどう？」

わたしは起き上がろうとしたけれど、ひどいめまいのせいで、結局起き上がれなかった。

「めまいがします……」

「今日のところは、無理はしない方がいいかもしれないわね。うちに連絡を入れておきましょう」

わたしは先生に自宅の電話番号を告げた。先生が電話をかける声が聞こえてくる。……お母さん、ショックだろうな。無理してでも食べておけばよかったかも。

電話を終えた先生が戻って来た。

「巡音さん、お母さんがすぐに迎えに来るそうです。担任の先生には、私から早退すると伝えておきますから」

「……わかりました」

わたしは保健室のベッドに横になったままで、お母さんが来るのを待った。どれぐらい経過しただろうか。あわただしい足音と共に、お母さんが血相を変えて保健室に飛び込んできた。

「リン！」

お母さんはわたしが寝ているベッドに駆け寄ってきた。その後で校医の先生に気づいて、慌てて頭を下げる。

「巡音さんのお母さんですね」

それから先生はわたしの状態について話し、この年頃の女の子は血液が不足しやすいので、栄養バランスの取れた食事を三度食べさせるようにと付け加えた。

バランスの取れた食事自体は与えてもらっている。食べなかったのはわたしで、お母さんのせいじゃないのに。

「リン、立てそう？」

わたしはめまいをこらえて、何とか起き上がった。

「ふらつくけど……多分大丈夫」

家に帰るぐらいなら、何とかなるはず。わたしはお母さんに支えられながら、保健室を出て、迎えの車に乗った。

「……怒らないの？」

家に帰る途中、車の中で、わたしはお母さんに訊いてみた。

「何を？」

「朝ごはん食べなかったことと、それが原因で倒れて、手間をかけたこと」

お母さんは、何故かため息をついた。

「起きてしまったことは仕方がないから……リン、家に着いたらおかゆを作ってあげるから、それを食べて、今日は横になってなさい」
わたしは頷いて、目を閉じた。やっぱりまだくらくらする。

帰宅すると、お母さんは言葉どおりおかゆを作ってくれた。さすがにもう残すわけにはいかない。それを全部食べてから、部屋に戻る。制服を脱いで寝巻きに着替え、わたしはベッドに横になった。

学校ではお昼休みぐらいの時間になった頃、携帯に着信があった。メールだ。差出人はミクちゃん。「どうしちゃったの？ 学校に来てないけど、具合でも悪いの？」と書いてある。……しまった。連絡を入れてなかった。「一度登校したんだけど、貧血で倒れて早退したの。連絡しなくてごめんね」と返信する。すぐに返事が来た。

「大丈夫？ 無理しちゃダメだからね」と書かれていた。

「ありがとう」とミクちゃんに返信した後で、わたしは鏡音君のことを思い出した。心配させた上に迷惑をかけたわけだし、一言謝っておいた方がいいかもしれない。……でも。

わたしは鏡音君のメールアドレスを知らない。ミクちゃんも……多分、知らないだろうなあ。ミク才君なら同じ部活だし、知ってい

るかもしれないけれど……。ミクちゃんに、ミクオ君にそのことを訊いてもらうのも気が引ける。

……それに、鏡音君に下手にメールをすると、携帯をチェックされた時に気づかれてしまうかもしれない。お父さんは時々抜き打ちでわたしの携帯を調べるから、見慣れないアドレスへの送信履歴があつたら問い詰めるだろう。そうなると、ごまかす自信がない。

また気分が重くなってきた。わたしはため息を一つつき、鏡音君に連絡することは諦めた。

冷たくもなく、熱くもない（後書き）

普通はこの状況になったら、後に待っているのはクラッシュだけなんです……。

クラッシュされると話がそこで終わってしまうので、無理にかなりの好条件を重ねて、そうならないようにしています。

クオの当惑

その日の昼、ミクからメールの着信があった。見ると、「今日のお昼、一緒に食べない？」と書かれている。ミクからお昼のお誘いか……。

ミクは大体いつも、昼飯は巡音さんと一緒に自分の教室で食べている。故に、俺に声がかかったということは、向こうに何か用事が入ったんだろう。……俺っていざという時のためのキープ君か？まあいいや。ミクに「いいぜ。中庭で待ってる」と返信すると、弁当箱と水筒を抱えて、俺は中庭に向かった。ベンチの一つにかけて待つことしばし。ミクが、自分の分の弁当を持って姿を現した。

「クオ」

ぶんぶんと手を振って、ミクはこっちに駆け寄ってきた。そのまゝ、俺の隣にすくと腰を下ろす。

「今日は振られたのか？」

そう訊くと、ミクは首を傾げた。

「振られたって？」

「巡音さん。お前、いつも昼は一緒だろ」

「クオ、振られたって言い方はないでしょ。リンちゃんはね、今日は学校休んでるの。具合が悪いんだって」

さすがにミクは心配そうだ。ま、友達が病気とくれば、誰だってそうか。

俺は頷きながら、自分の弁当箱の蓋を開けた。今日も美味そうだ。一口カツを箸でつまんで口に入れる。

「具合が悪いって、風邪か何か？」

「貧血だって」

「それ、病気か？」

軽い気持ちで訊いたら、ミクにこつんと額を叩かれた。

「あのねえ、あれ、辛いんだからね」

「経験したことあるような口ぶりだな」

「わたしだって、貧血になったことくらいあるわよ」

ミクはそんなことを言った。お前が貧血ねえ。

「血の気多いの？」

むしろ血の気が多すぎてぶっ倒れましたと言われた方が、まだ納得できるような。

「もう、クオってば！ 女の子はね、色々と大変なの」

お前に言われても説得力がないんだが……あんまりミクを怒らせると、また俺の首を絞めかねないな。もうよそう。

今日は部活の活動日だ。もっとも、演劇部の大きなイベントである学祭は終わったので、ここところは基礎の体力作りや発声練習とかをやってるだけである。……退屈だ。やっぱり、舞台の練習の方が楽しい。

されはさておき、今日は一つ妙なことがあった。部活の最中、レンがぼーっとしていたのだ。いつも真面目にやってる奴なのに。

「……レン、お前、今日なんか変だぞ」

気になったので、俺は部活が終わった後、レンにそう訊いてみた。こいつも具合が悪いとか言い出さないだろうな。

「なあ、クオ。あのさ……」

「なんだよ」

「……やっぱいいや」

おい。言いかけて途中で止めるなよ。

「言いかけたことは最後まで言えよ」

「大したことじゃないからいい」

「気になるだろ」

レンはちよつと考え込む表情になって、それからこんなことを訊いてきた。

「クオ、お前、なんで恋愛映画嫌いなんだっけ？」

……はあ？　なんでいきなりそんな、どうでもいいことを訊いてくるんだ。俺は時々、本当にこいつがわからなくなる。

まあいいか。

「だって退屈じゃないか」

「そんだけ？」

「なんかずーっとうだうだやってるだけだろ、あれ。俺には理解できない世界なんだよ」

とつと好きですつって、カップルになればいいだろ。……それじゃ映画が三十分で終わるか。要するにそれだけの話ってことだ。

「初音さんは好きそうなのに」

レンはそんなことを言ってきた。あゝ、ミクはな。もっともあいづが好きなのはラブコメの類で、ドロドロの不倫恋愛とかはお断りなんだが。

「ミクはなゝ、基本的に、可愛らしいもんが好きなんだよ。動物が出てくる映画とかも好きだぜ、あいつ。そっちならまだ見てられるんだけど、恋愛映画は、俺はパス」

飼ってる犬もボメラニアンで、名前はニッキ。ミクは「ニキちゃん」と呼んでいる。ミク曰く「ぬいぐるみたいで、可愛いでしょ」とのこと。でかい方が抱きつきがいがあるといいと思うんだがなあ。その点俺のジョン（ハスキーミックス、雄、四歳）は……。

……って、レン、お前、俺の話聞いてないじゃないか。人に話振っとしてそれはないだろ。いや、聞いてないというより、心ここにあらずって感じか。どうしたんだこいつ。

「レン、どうしたんだ。またばーっとして」

「ちよっと考え事」

それがレンの返事だった。何か悩みでもあるんだろうか。

「悩みがあるんだったら聞け」

「悩んでほじじゃない。ところでクオ、お前、ガラスって言われて何連想する？」

はあ？　お前、本当にわからない奴だな。

「なんだよ、今度は連想クイズか？ ガラス……ガラスねえ。窓だろ、コップだろ、電球だろ……ぱっと思いつくのはこんなところか」
「うーん……」

レンは腕を組んで考え込んでしまった。俺の答えはお気に召さなかったらしい。何なんだよ、本当に。

「ガラスの靴」

ふっと、俺はそんなことを思い出した。ミクが以前、そんな話をしていた。レンが怪訝そうな顔になる。

「……へ？」

「『シンデレラ』だよ。ミクなら絶対そう言うね」

いつだったかな。確か、まだ俺たちは小学生だった。ミクが「ガラスの靴がほしい！」って大騒ぎしていたことがあったっけ。多分、絵本かアニメで見たんだろう。懐かしいな。

「うーん、そうじゃないんだよね……」

結局レンの奴は、何を悩んでいるのかは教えてくれなかった。

部活を終えて帰宅すると、ミクは居間でテレビを見ていた。……音楽番組か。

「あ、クオ、お帰り」

「おう、ただいま」

「ねえクオ、今ね……」

ミクは最近お気に入りのアイドルについて、あれこれ話し始めた。ちなみにミクの趣味は結構移り気で、お気に入りによく変わる。

「ミク、ちよつといいか？」

「何？」

「お前、ガラスって言われて何を連想する？」

ミクはちよつと首を傾げて考え込み、それからおもむろにこう言った。

「ガラスの靴！」

……やっぱり。

「それって『シンデレラ』だよな」

「決まってるじゃない」

些細な予想だけど、当たると何となく嬉しいもんだ。

「もしかしてプレゼントの話？」

期待するような表情で、ミクがそう訊いてくる。プレゼント？

誰が、何をだよ。

「……なんでそうなるんだよ」

そう言つと、ミクはむっとした表情になった。

「クオのバカ！」

クツションが飛んできた。おい！　と言うまでもなく、ミクは部屋を飛び出して行ってしまった。……あいつの考えていることもよくわからん。レンといいミクといい、一体何なんだ。

クオの当惑（後書き）

ドロドロの不倫恋愛映画が好みという女子高校生、いたら怖いと思う。

それにしてもこの話のクオは、えらく不憫なような。

わたしの魂は空虚で

火曜日。めまいは治まったので、学校に行こうとしたのだけれど、お母さんに止められてしまった。

「昨日倒れたのよ。リン、大事を取って今日も休みなさい」

「……もう平気よ」

「いいから、今日は家にいなさい。学校には連絡しておくから」

結局、わたしは休むことになってしまった。何だかちょっと後ろめたい。朝食を食べて、自分の部屋に戻る。そうだ、ミクちゃんに「今日も休む」って、メールしておかなくちゃ。携帯を取り出して、メールを送信する。

さてこれからどうしようか。めまいはもう治まっているから、横になる必要もない。突然できてしまった空白の時間に。わたしは戸惑っていた

音楽でも聞か、本でも読むか……結局、いつもと同じになるのね。ため息をつきつつ、CDやDVDの並んでいる棚の前に立つ。

その時、あることに気づいた。

「……あれ」

並べておいたDVDが崩れていて、一枚が床に落ちている。なんでこんなことになっているんだろう。……昨日、ふらついた時にぶつかりでもしたのだろうか。考えてみたが、思い出せない。わたしはため息をつく、崩れたDVDを並べなおし、落ちていたDVDを拾い上げた。ケースを開けて中を確認する。……破損はないみたい。

落ちていたDVDは、十九世紀のフランスの作曲家、マスネが作ったオペラ『タイス』だった。確か宗教物よね。前に見たの、いつだったかな。

……もうこれでいいか。わたしは『タイス』のDVDを片手に、部屋の外に出た。わたしの部屋にはテレビやパソコンといった、映

像の再生機器が無い。だからDVDを見ようと思ったら、下の居間に行かなくてはならないのだ。

居間には誰もいなかった。お母さんはキッチンか、自分の部屋に
いるのだろう。平日だからお父さんとルカ姉さんは当然仕事だし、
ハク姉さんは相変わらず自分の部屋だ。わたしはDVDをプレーヤ
ーにセットして、リモコンのスイッチを押した。

このオペラの舞台は昔のエジプトだ。でもこの舞台では、演出は
あまりエジプトということは意識していないみたい。着ているもの
も、エジプトの衣装じゃない。かといって、現代でもない。ちょっ
と不思議な感じの衣装をみんな着ている。外国の有名な劇場の公演
だから、背景も衣装もかなり凝っている。

画面では、主人公の修道士アタナエルが、遊女のタイスを改心さ
せたいという決意を歌っている。タイスは昼は舞台にあがる人気ス
ター、お金を積まれれば身体も売るといふ設定だから、例えて言う
なら吉原の花魁や太夫が近いだろうか。そんな彼女がアレクサンド
リアを墮落させているから、正しい道に導いてやりたい——早い話
出家させたいということだ——のだと。修道院長は止めるけれど、
アタナエルはこれが自分の使命だと言って、反対を押し切って出か
けていく。どうしてあんなに一生懸命なんだろう。

ふっと、鏡音君が言っていたことを思い出した。鏡音君のお姉さ
んが、ロドルフォのことを「ヘタレ」だと言っていた、という話だ。
鏡音君のお姉さんだったら、アタナエルのことはなんて言うのかな
……なんだろう。胸が痛い。

アレクサンドリアに行ったアタナエルは、旧友の哲学者、ニシア
スと再会する。タイスの所在を訊くと、ニシアスはタイスは自分の
館にいと答える。ニシアスはタイスをお金で館に引き留めていた
のだ。二人は、ニシアスの館の宴で出会う。

アタナエルは信仰の素晴らしさを説き、タイスは情愛の素晴らし
さを歌って、アタナエルをあしらう。くいちがう二人の言葉。正直
わたしには二人の言うことがよくわからない。タイスが歌って讃え

る情愛のことなんて、わたしでは理解のしようがないし、アタナエルが歌う信仰についてはもっとわからない。二人が、違うものを信じているということだけが、かるうじてわかるぐらいだ。このオペラはよく「霊と肉の相克」と説明されるけれど、その言葉の意味もわからない。……駄目だな、わたし。マスネの音楽はとても綺麗なのに。

「……リン？」

後ろからお母さんに呼びかけられて、わたしははっとなった。

「あ……お母さん」

わたしはリモコンの一時停止ボタンを押そうとして、戸惑った。いつの間にか、最後のシーンになっている。死にかけているタイスと、アタナエルの二重唱だ。相変わらず二人の言うことはくいちがつている。今度はタイスが信仰の素晴らしさを歌い、タイスに魅了されてしまったアタナエルが、情愛について歌っているのだ。いつの間にか、二人の立場は最初とや逆になってしまっている。

「お昼ごはんよ」

「うん……すぐ行く」

おかしいな……まだ第一幕だったはずなのに。居眠りしちゃったんだろうか。DVDを止めてテレビの電源を切り、わたしは食堂に向かった。お昼ごはんを食べながら、さっきのことを思い返してみる。やっぱり、寝ちゃったのかな。オペラを見ながら居眠りなんて、わたしらしくないけれど。

「リン、具合はどう？」

「もう大丈夫」

「無理はしないのよ」

「……ええ」

お昼ごはんを食べ終わった後、わたしは居間に向かった。居間のテーブルの上には、タイスのケースが置きっぱなしになっている。わたしはプレーヤーからDVDを取り出してケースに仕舞うと、それを持って、自分の部屋へと戻った。

わたしの魂は空虚で（後書き）

当初はこの次の章とあわせて一つの章にする予定だったのですが……どうも座りが悪いので、切りました。そのせいで短いですが

鏡よ、答えて

夢の中で、わたしはタイスになっていた。場所はタイスの部屋。中央に大きなベッドが置いてあって、わたしはそこに座っている。

どうしてわたしは、ここにいるのだろう？ 考えてもわからない。わたしは立ち上がって、部屋の中を歩き回った。がらんとしている。ほとんど何も無い。壁際に、大きな鏡がかかっているぐらいだ。

わたしは鏡の前に立った。鏡には、当然わたしの姿が映っている。胸元の開いた裾の長い衣装を着て、宝石のついた装身具をたくさん身に着けた姿だ。……ルカ姉さんの方が似合いそうね。十代のわたしじゃ、衣装の派手さがどうしても浮いてしまう。

「誠実な鏡よどうか答えて。わたしは……」

何を訊きたいんだっけ？ 考えたが出てこない。わたしは苦笑した。これじゃあ鏡の方でも困ってしまっただろう。もっとも、この話は白雪姫じゃないから、鏡は喋ったりはしないのだけれど。残酷に、真実を映すだけだったはず。

わたしはそつと手を伸ばして、鏡の表面に触れてみた。その瞬間、鏡の表面がさざなみのようにゆらめいて、映像がぼやけた。

「……え？」

ゆらめきはすぐに収まり、鏡の表面は元に戻った。でも、そこに映っているものは、わたしじゃない。

お母さんだ。でも、今よりももっと若い。ソファに座って、編み物をしている。そこに走ってくる、リボンを着けた四歳くらいの小さな女の子。両手に、しっかりと一冊の絵本を抱えている。

「ねえ、ママ。えほんよんで」

……あれは、わたしだ。今より、もっとずっと小さかった頃のわたし。

「いいわよ。さ、こっちいらっしやい。何を読むの？」

お母さんがわたしを抱き上げて、膝に乗せる。鏡の中のわたしが、

絵本を手渡す。

「あのねえ、これ！」

「あら、また『シンデレラ』なの？ 今日とは別のにしたら？」

鏡の中のわたしは、首を横に振る。

「うっん、これがいい」

「わかったわ。それじゃあ読むわね」

お母さんが絵本を読もうとする。でも、鏡の中のわたしは膝を滑り降りる。

「あ、ちよつとまって！ うさちゃんをとってくる！」

駆け出していく、鏡の中のわたし。やがて戻ってくる。その手には、ピンクのうさぎのぬいぐるみが抱えられている。

……うさちゃんだ。

鏡の中のわたしは、もう一度お母さんの膝に乗って、自分の膝にはうさちゃんを乗せている。お母さんが、にっこり笑う。

「うさちゃんにも聞かせてあげるの？」

「うん！」

「じゃあ読みましょうか。『むかしむかし、あるところに……』」

……あの頃は、こんな毎日が当たり前だった。

わたしの前で、もう一度映像がぼやける。再び映像が鮮明になった時、今度はさっきとは違う光景が映っていた。

さっきよりも、少し成長したわたし。顔をぐしゃぐしゃにして泣きじゃくっている。隣にはお母さんがいて、必死でわたしをなだめている。

「ほら、もう泣かないの」

鏡の中のわたしは泣きやまない。

「ね、いい子だからもう泣くのはやめて」

「だって……ママ……」

鏡の中のわたしは相変わらず泣き続けている。途方にくれるお母さん。そこへ、お父さんがやってきて、泣いているわたしを怒鳴りつける。

「いつまで泣いているんだっ！ お前はもうじき三年生になるんだぞ！ 絵本やぬいぐるみなんかも卒業しなさいっ！」

鏡の前でわたしは、はっとなった。これは、あの日だ。鏡の中では、八歳のわたしが、更に激しく泣き出している。

「リン、いい加減にしないか！」

……やめてよ。

「あなた……そんな大声出さなくても……」

自分の方が泣きそうな声で、お母さんがそう言う。でも、お父さんの返事は、確か……。

「お前は黙ってる。自分の腹を痛めたわけでもないくせに」

お母さんは、それ以上何も言おうとしない。鏡の中のわたしが、お父さんに向かって叫ぶ。

「パパなんか……パパなんか……大っきらいっ！」

「親に向かってその口の聞き方はなんだっ！」

顔を真っ赤にして、お父さんが叫ぶ。鏡の中でわたしが、ひきついても起こしたかのように泣き叫んでいる。

「あなた……リンはまだ小さいんですから……」

「ルカがこれぐらいの年の時は、もっと聞き分けが良かったぞ。お前が甘やかすから、こうなるんだ」

鏡の中でお父さんが、わたしの腕をつかんで引きずっていく。泣きわめくわたしを、お母さんが泣きそうな表情で見ている。

「もうやめてよっ！ こんなもの見たくないっ！」

鏡の前で、わたしは叫んだ。八歳だったわたし。三月のあの日、お父さんは、わたしの絵本やぬいぐるみをみんな捨ててしまった。大事にしていたうさちゃんも、たくさんあったお気に入りのお絵本も、全部、全部、捨てられたんだ。

「リン、お前はしばらくそこで反省してる。いい子になるまで、出してやらんからな」

「いやあっ！ 出してっ！ 出してっ！ ここはいやあっ！」

お父さんの前で泣き続けたわたしは、罰として暗いロフトに放り

込まれた。薄暗いその場所が子供心に怖くて、ずっと泣いていたけれど、誰も来てくれなかった。泣き疲れて眠ってしまって、目が覚めたらロフトは真っ暗になっていた。わたしはパニックを起こしてそれから、確か……。駄目だ。この先は思い出せない。この鏡を見れば映るだろうけれど……。

わたしはうつむいた。こんなこと、ずっと忘れていたかった。もう見るのはよそう。鏡に背を向けて、歩き出そうとする。顔をあげて、はっとなった。いつの間にか、部屋の中に他の人がいる。

それは修道士アタナエルだった。

「タイス、逃げてはいけない」

「嫌よ！ あんなもの見たくない！」

わたしは叫んだ。アタナエルがわたしの手をつかむ。

「きちんと向き合うのだ。さもなければ、私のように、信じるものを失うことになる」

「わたしのことなんか放っておいてよ！」

あなたの信仰なんて、わたしは知らない。わたしに構わないで。放っておいて。

「それはできない。私は修道士アタナエルで、君はタイスだから」

「わたしはタイスじゃないわ」

「君はタイスと同じように逃げている。逃げるのはやめて、向き合いなさい」

「できないわよ！ わたしの中には何も残ってないの！」

だって……みんな、取り上げられてしまっただから。

「やりなさい。心をガラスに閉じ込めるんじゃない。君はあの詩人みたいに、若くして自殺したいのか！？」

「だからできないの！」

自分自身の絶叫で、目が覚めた。わたしは驚いて、身体を起こした。いつもと同じわたしの部屋だ。

「……夢、だつたんだ」

嫌な夢。わたしは暗い気持ちのまま、ベッドから抜け出して、時計を見た。いつも起きるよりちょっと早い時間だ。でも、もう一度寝る気にもなれない。このまま起きてしまおう。

寝巻きの上にガウンを羽織って、部屋の外に出る。行き先は洗面所だ。鏡を見る……ひどい顔。わたしはため息をつきながら、冷たい水で顔を洗った。少しはましになっただろうか。

「あら、リン。今日は早いね」

ルカ姉さんだ。今起きたところみたい。わたしと同じように、寝巻きの上にガウンを羽織っている。

「目が覚めちゃって……おはよう、ルカ姉さん」

「おはよう。終わったのなら、そこいいかしら？」

わたしはルカ姉さんに場所を譲った。ルカ姉さんが顔を洗い出す。わたしは自分の部屋に戻った。

今日こそは学校に行かなくちゃ。いつまでもぐずぐずと休んでい

るわけにもいかないし。クローゼットを開けて、制服に着替える。

……早い時間に起きたから、時間が余ってしまった。わたしは部屋の椅子に座って、ぼんやりとしていた。そうしていると、どうしてもさっきの夢が頭に蘇ってくる。

……逃げないで、向き合え、か。タイスは、何と向き合っただ

っけ？

わたしは立ち上がると、CD棚から一枚のCDを取り出した。ヴァイオリンの有名な曲を集めたCDで、「タイスの瞑想曲」も収録されている。わたしはCDをプレーヤーにセットして、瞑想曲の番号を押した。

……何度聞いても綺麗な曲だ。ヴァイオリンが、優しくて甘くて、いたわるような旋律を奏でている。一分半を過ぎた辺りから、少しテンポが早くなって、何かを動かすかのような激しさを少しだけ見せて、それから、また、甘く優しい音色に戻っていく。

わたしはタイスの瞑想曲を聞きながら、ドレッサーの前に座って

鏡を見た。第二幕で一人になったタイスは、派手な生活を送っていても、自分の心は満たされないと歌う。そして、自分の美貌は永遠に衰えないのよね？ と鏡に問いかける。もちろんそんなはずはない。現実から目を背けたくても、現実を突きつける。それが鏡の役割だ。

その時、月曜の朝、鏡音君に言われたことを思い出した。

「巡音さんには自分の意見ってものが無いの？」

わたしは不意に怖くなって、鏡の前から離れ、CDを止めた。

鏡よ、答えて（後書き）

鏡という小道具はかつては虚栄の意味合いが強かったのですが、近代に入ってから「真実を映す」という意味合いで使われることも多くなりました。この『タイス』でもそうですし、私の好きなG・マクドナルドの作品にもそういうシーンがあります。

余談ですが、『タイス』の衣装は、特にこれといって決まってい
るわけではありません。私が見たことのあるものは2008年度の
メトロポリタン（タイス役はルネ・フレミング）と、2002年度
フェニーチェ（タイス役はエヴァ・メイ）のものです。双方で
かなり衣装は違っていました。

2008年度メトロポリタン↓http://www.theepochtimes.com/n2/index.php?option=com_content&task=view&id=8683

2002年度フェニーチェ↓http://1.bp.blogspot.com/_fNwIxaU8w/TDZNSBg9zI/AAAAAAAAASi/NZemZ0Fx9bA/s1600/Thais.png

衣装はメトロポリタンの方が素敵なんです。キャストはフェニー
チェの方が良かったです。アタナエル役のミケール・ペルトウー
ジがハマりすぎ。メイのタイスも声がピッタリでした。

最後の方でリンが聞いている「タイスの瞑想曲」は、こういう曲
です。↓<http://www.youtube.com/watch>

c
h
?
v
||
m
X
u
z
L
R
V
i
6
q
k

その耳に届くただ一つの調べがあれば

お母さんはまだ心配そうだったけれど、わたしはもう大丈夫と何度とも言って、この日は学校に行った。

学校に着いて教室に入ると、わたしはいつものように持ってきた本を広げた。そう言えば、この本は何だったっけ……。思わず本の表紙を確認してしまう。ガルシンの短編集だった。……なんでこんな本、持って来ちゃったんだろう。

正直、今読むのに向いた本とはいえない。わたしは半ば上の空で、並んだ文字だけを追っていた。

「おはよう、巡音さん」

突然後ろから声をかけられて、わたしは飛び上がりかけた。振り向くと、鏡音君がいる。ええと……。どうしよう。

「……おはよう、鏡音君」

何とかそう返したものの、次の言葉が出てこない。この前のこと、謝らなくちゃいけないのに。思わず下を向いてしまう。

「貧血は、もう大丈夫なの？」

わたしが何か言う前に、鏡音君の方からそう言ってきた。

「……ええ、もう平気。この前は……。その……。ごめんなさい」

下を向いたまま、わたしは何とかそれだけを口にした。

「あゝ、気にしてないからいいよ」

鏡音君はそう言ってくれたけど、わたしはそうは思えなかった。

「でも……」

口にしかけたけれど、それから先が出てこない。そもそも、何を言ったらいいんだろう？ そんな時、鏡音君がこう言い出した。

「それより巡音さん、今日、時間空いてる？」

「え？」

言われた意味がわからず、わたしは訊き返した。

「良かったら、放課後、ちょっと話せないかな」

「話すつて……何を？」

「大したことじゃないんだけど、巡音さんに訊きたいことがあって」
「……わたしに？」

「そう」

鏡音君は頷いた。何がしたいのかよくわからないけれど……。

でも、それを言ったら……そもそも、わたしは、何がしたいの？
ふっと、今朝の夢が頭に蘇った。

「多分、大丈夫だと思う……」

気がつく、わたしはそう答えていた。

「それ、いいつてこと？」

鏡音君が確認してきたので、わたしはもう一度頷いた。

「じゃあ、放課後、屋上に来てくれる？」

「……わかったわ」

そう答えると、鏡音君は、それじゃあ、と言って、自分の席へと向かった。

……何をやっているのかな、わたし。でも、約束しちゃったし……

……。あ、そうだ。運転手さんに、お迎えを遅らせてもらうよう連絡をしておかないと。理由は……あんまり込み入った理由だと、逆に疑われちゃうか。と、その時。

「おはよう、リンちゃんっ！　ねえ、貧血は大丈夫？」

ミクちゃんだ。ミクちゃんはこっちに駆け寄ってくると、心配そうな表情でわたしの顔を覗きこんだ。

「なんだかまだ青白くない？」

「もう大丈夫だから」

これ以上、ミクちゃんを心配させるわけにはいかない。

「昨日も大事を取って休んだだけで、ほとんど体調は戻っていたの。だからあんまり心配しないで」

「リンちゃん。わたしはね、友達だから、心配する権利があるのよ」
ミクちゃんはそんなことを言い出して、わたしの手をぎゅっと握った。ミクちゃんの手は温かいな。

「あ……ねえ、ミクちゃん」

「何？」

「あのね……今日の放課後、ミクちゃんと一緒にいたことにしても
られない？」

放課後になった。ミクちゃんは、放課後一緒にいたことにしてお
いてもらえないかという、わたしの唐突な頼みを、あれこれ訊かず
に快諾してくれた。

「リンちゃんも、たまには羽根伸ばさなくちゃ。わたしにできるこ
とがあつたら、何でも言つてね」

ミクちゃんは「じゃあね！」と明るく言つて、帰つて行つた。…
ミクちゃんがいなかったら、わたし、どうなっていたんだろう。

鞆を手に、屋上への階段を上がる。そう言えば、屋上に行くのは
初めてだ。屋上に行くだけじゃなくて、図書室や部室以外の場所に
寄つて帰ることも。

屋上へと続く階段を上り、重い扉を開けて外に出る。目の前に秋
晴れの青い空が広がった。

「……あ」

鏡音君はもう来ていた。わたしは鏡音君の近くに行った。

「鏡音君、話つて、何？」

「あ、えーと……」

鏡音君は自分の鞆を開けて、中から何か取り出した。

「まずはこれ、返しとくよ。どうもありがとう」

……『ラ・ボエーム』のDVDだ。わたしはそれを受け取つて、
自分の鞆に入れた。これを返すぐらい、教室でもできると思うけど
……。

「あの……巡音さん、二日前のことなんだけど」

そんなことを考えていると、鏡音君がこう切り出してきた。わた
しが倒れた日のことだ。

「巡音さん、倒れる前に『ガラス』って言ってたけど、何のことだったの？」

……ガラス？ そんなこと言ったたろうか。

「わたし……そんなこと言った？」

「少なくとも俺にはそう聞こえたけど」

鏡音君がそう言ったので、あまり思い出さなくなかったが、わたしは倒れる前のことをもう一度思い返してみた。でもやっぱり思い出せない。

「ごめんなさい……憶えてないわ」

ガラスか……。そう言えば今朝の夢では、アタナエルがわたしに「心をガラスに閉じ込めるな」って言ったんだっけ。

心をガラスに閉じ込めたシルヴィアは、三十代で命を絶った。夢は所詮、夢だけど……。

「ガラスって、透き通っているから外が見えるのよね。だから、ガラスの中に閉じ込められたら、すごく苦しいと思う。外は自由に見えるのに、自分は動けないから」

気がつくと、わたしはそんなことを言っていた。だから、シルヴィアは辛くて、自分で自分の命を絶ってしまったんだ。

「その状態だと、眠っている方が楽だと思う？」

鏡音君はしばらく考えてから、わたしにそう訊いてきた。……え？ 鏡音君がそんなことを言い出すとは思っていなかったの、わたしは驚いてしまった。

「……多分、ね。眠っていれば、外は見えないから」

見えなければ苦しい思いをしなくて済むだろう。眠るというのは、ある意味では時間が停止すること。何も感じないで済むし、考えなくて済む。

「何も見えないし、何も感じないんじゃない？」

鏡音君はそんなことを言ってきた。

「だから楽なのよ。見えるけれど動けないのとは違うから」

見えることは苦痛だ。時々思う。眠ったまま、目が覚めなければ

いって。

「でもそれだと、死んでいるのと一緒になんじゃない？」

「……一緒かも」

どっちでもいいことだ。

でも……オペラ『タイス』では、信仰に目覚めたタイスは幸福を感じながら死んでゆく。目覚めて死ぬのと、眠ったまま時を停止させるのでは、やはり違うのかもしれない。……タイスは、少なくとも幸せだった。

……幸せって、一体何？

「ちよつとほつとした」

わたしがあれこれ考えていると、鏡音君がそう言い出した。

「……え？」

「巡音さんの考えてること、初めてちゃんと聞いたから」

どうしてそれでほつとするんだろっ……？ わたしにはわからない。

「どうして鏡音君がそんなことを気にするの？」

「単なる好奇心だよ」

訊いてみたところ、そんな答えが返ってきた。……どう反応したらいいんだろっ。

「あ……それと」

わたしが頭を悩ませていると、鏡音君が鞆から、何かを取り出した。それをわたしに差し出す。

「良かったら、これ、見てみない？ 残念ながら映画版だけど」

わたしは、差し出されたDVDを受け取った。パッケージの表面は八分割されていて、それぞれにキャストとおぼしき人が映っている。中央には『RENT』の文字。裏返すと「トニー賞&ピューリッツァー賞受賞 伝説のミュージカル完全映画化！」の文字が目に入った。

「これ……鏡音君がこの前聞いていた曲のミュージカル？ 『ラ・ボエーム』が原案の」

「そうだよ」

わたしはもう一度、DVDの裏面を眺めた。「未来も過去もない。僕らはこの一瞬を生きる。最後の瞬間まで……」と書かれている。……『ラ・ボエーム』に、こんな歌詞は無かった。どうしたら、こうなるんだろう？

……見てみたいな。

でも……。

前にも書いたことだけど、わたしは映像の再生機器を持っていない。居間のプレーヤーでこれをかけたら、間違いなく誰かの目に止まってしまう。

「……巡音さん？」

鏡音君にそう声をかけられて、わたしははっとなった。

「こういうのには興味ない？」

「そうじゃなくて……」

わたしはどうしようか、思い悩んだ。

「言いたいことあるならはっきり言ってくれていいよ」

全部……喋った方がいいのかもしれない。鏡音君に対しては。

「あのね……わたしとしては、これ、とても見てみたいんだけど……」

……

言いづらい。でも、言わなくちゃ。

「わたしの家……この手のもの、全部禁止なの……」

小さい頃からずっとそうだった。そして、それは今も変わっていない。

「……全部って？」

「漫画とか、アニメとか、ゲームとか、最近の音楽とか……」

だからわたしはこの手のものを満足に知らない。映画も、昔の名画とか、そういうものだけに限られている。ミクちゃんの家で映画は時々見せてもらっけれど、漫画やゲームは怖すぎて触る気になれない。

「えーっと……それ全部禁止なの？ 何か条件ついてるとかじゃない

くて、最初から全部？」

鏡音君が信じられないといった表情で訊いてきたので、わたしは頷いた。

「そういうものは、悪影響があるって……」

どういふ悪影響があるのかまでは説明してもらってないので、よくわからない。それに、ミクちゃんの家はどれも禁止じゃないけれど、ミクちゃんに何らかの悪影響が出ているようには見えないし……。

「俺の本音を正直に言わせてもらうと、巡音さんの親って、厳しすぎるというか、むしろおかしいと思う」

きっぱりと鏡音君はそう言い切ってしまった。

「……やっぱり、そう思う？」

おかしいのはわたしの家の方なのよね。

「やっぱりって？」

「わたしも……その、変じゃないかとは思ってたんだけど……。ミクちゃんの家は、どれも禁止じゃないし……。あまり話したことないけど、他の人もそうみたいだし……。でも、ミクちゃんの家はミクちゃんの家だから……」

「要するに、これが我が家ルールなんだからそれに従ってろって、そう、言われているわけ？」

わたしはまた頷いた。ずいぶん前に一度、訊いてみたことがあるのだけれど、大体こんな感じのことを言われて、怒られて終わりだった。

「そういうわけだから……わたし、これ、借りて帰るわけにはいかないの。もし見つかったら、鏡音君にも迷惑がかかるし」

どうなるかは想像したくない。鏡音君が相手だったら、お父さん、怒るだけじゃ済まないかも。

「迷惑って？」

「……わたしがまだ小さかった頃の話なんだけど、ミクちゃんに漫画を貸してもらったことがあるの。そうしたら、それが見つかって

……お父さん、ひどく怒って。ミクちゃんの家で電話をかけて……
ひたすら苦情を……」

あの時。お父さんはミクちゃんの家で電話をかけて、電話口です
と強い調子で文句を言っていた。わたしは、お父さんが怖かった
のと、ミクちゃんへの申し訳なさで、ずっと部屋の隅で震えていた。
「その時、巡音さんいくつだったの？」

「確か……小学校の一年生」

幸い、ミクちゃんは怒らなかった。だから、わたしたちの関係は
今も続いている。わたしの方が、一方的にミクちゃんの好意に甘え
ているような状態ではあるけれど。でも……わたしにとって、ミク
ちゃんは大切な友達だ。

「あのさ……巡音さん。だったら、いつそ俺の家に来る？」

え……？ 想像していなかった申し出に、わたしの頭の中は真っ
白になった。

「家って……」

……鏡音君の家に、行くってこと？

「だから、俺の家。友達連れてきてどうこう言われるような、うる
さい家じゃないから。クオはよく遊びに来てるよ」

ミク才君は、そうだろうけど……。鏡音君の家に行くなんて、絶
対に許可してもらえない。それだけじゃない。何を言われるか……。
でも……このミュージカルがどんなものなのか。『ラ・ボエーム』
がどうやって、現代のお話になったのかは見てみたい。鏡音君も考
えてこう言ってくれたわけだし、断りたくはない。

言ったら……確実に怒られる。怒られるだけじゃない。下手をす
ると外出禁止にされてしまうかも。

じゃあ……言わなかったら？ 黙っていたら、もしかしたら、わ
からないんじゃない？

いけないことなのはわかってる。でも、わたしはどうしてもこ
のミュージカルを見てみたかった。

こんな風に何かを積極的に見たいって思うのも、ずいぶん久しぶ

りのような気がする。

「……本当に行つていいの？」

「来るつてこと？」

わたしは頷いた。

「……日曜なら、なんとか、家を抜け出せるところから……」

一日図書館で調べ物をするつて言えば、ごまかせるかもしれない。劇場も考えたけれど、あれだといつ終わるのがはつきりしてしまふ。その点図書館なら、閉館ぎりぎりまでいてもおかしく思われなはいはず。

「鏡音君の家つて、どこにあるの？」

わたしが訊くと、鏡音君は手帳を取り出して、何やら書き始めた。そしてそのページを破つて、わたしへと差し出す。

受け取つてみると、鏡音君の住所と電話番号が書いてあつた。携帯の番号とメールアドレスも。

「俺の家、ちよつとわかりにくいところにあるから、駅に着いたら電話して。迎えに行くから」

「……ありがとう」

「ついでに巡音さんの携帯の番号とアドレスも教えてもらえる？
もしうちに不都合があつたら、連絡しないといけないから」

鏡音君は、もっともなことを言つた。それ以前に、わたしの方からも教えるのが筋だろう。でも……。

「あの……教えるのはいいけど、なるべくかけないでもらえる？」

「どうして？」

「お父さん、わたしの携帯を調べることがあるから……見慣れないアドレスがあつたら、多分問い詰めると思うの」

鏡音君が呆れた表情になつたので、わたしはいたたまれなくなつた。

「だから、教えてくれたのは嬉しいけれど、わたしの方から携帯とかにかけることは、多分ないと思うの……ごめんなさい」

それから、わたしは自分の携帯番号とメールアドレスを、紙に書

いて鏡音君に渡した。

「それじゃあ、日曜日に」

「ええ……ありがとう」

そうして、わたしたちはそれぞれ自分の家に帰った。

その耳に届くただ一つの調べがあれば（後書き）

この作品は一人称で書かれているので、当然、キャラクターごとに持っている情報量に違いがあります。よって、リンの知っていることを他のキャラが知らなかったり、その逆もあります。

何が言いたいのかというと、あるポイントにおいてリンは事実を正しく認識していないということです。本筋とは直接関係ない部分ではありますが。

作中でリンが読んでいる作家、ガルシンですが、私は小学生の時に、児童向け文学全集に収録されていた、彼の『信号』という短編小説を読んで、一週間ぐらいひどく落ち込みました。要するに、そういう作家です。ただし名作だとは思いますが。

どんな作品書くの？ という方はこちらをどうぞ。ただし私みに落ち込んだとしても、保証はしません。

http://www.aozora.gr.jp/cards/000340/files/48128_34445.html

（本当は、『信号』にリンク貼りたかったけど、ここには収録されていないですね……）

道は歩くにつれてできるもの

その日の夕食の時間——お父さんは仕事、ルカ姉さんも仕事、ハク姉さんは自分の部屋、したがって、お母さんとわたしだけ——の時、わたしはお母さんに、日曜の予定について話すことにした。

「次の日曜は、図書館で調べ物をしようと思っているの」

図書館で調べ物は、前から度々やっているから、変に思われなはずだ。

「調べ物？ どれぐらい？」

「多分、一日かかると思うわ」

「そう……じゃあ、行つてらっしゃい。お弁当持たせてあげるから、門限までには帰ってくるのよ」

予想通り、お母さんは怪しまなかった。嘘をついてしまった罪悪感で、胸が痛む。……ごめんなさい、お母さん。

日曜になった。わたしは鞆に必要そうなものを詰めて、車に乗り込んだ。図書館までは少し距離がある。図書館で車から降りると、運転手さんは「では、夕方お迎えに来ます」と言つて、車で引き返して行つた。わたしは車が見えなくなると、図書館には入らずに、道を歩き始めた。

……何だか落ち着かない。わたしはいわゆる「箱入り娘」なので、こんな風に外の道を一人で歩くのは初めてだ。図書館から駅までの道の地図はコピーして来たけれど、何度も、こっちでいいのか確認してしまう。

幸い道は間違つていなかったようで、しばらく歩くと駅に着いた。わたしは大きく息を吐いた。次は切符を買わなくちゃ……。

切符を買つて、電車に乗る。……実はこれも初めてだ。もともと出歩く方では無いし、外出時は車で送り迎えしてもらえるので、電

車などの公共の交通機関を利用する機会が無かったのだ。だから学校の遠足や修学旅行以外で電車に乗ったことはないし、そういう時は切符はまとめ買いだし……。

来るまでは自分にできるのかどうか不安だったが、いざ来てみると、拍子抜けするぐらいことは簡単だった。わたしは電車の座席に座って、一息入れようとした。だが上手くないかない。結局、目的の駅につくまで、わたしはずっと緊張しっぱなしだった。

鏡音君の家の近くの駅に着いた。この駅はあまり大きくないので、改札は一つだけだ。駅前に公衆電話があつたので、そこから鏡音君の家にかける。コール三回で、相手が出た。駅に着いたことを告げると、すぐに行くので改札の前で待っていてくれ、と言われた。

わたしは落ち着かない気持ちのまま、改札の前で待っていた。十分ほどで、鏡音君が来てくれた。

「巡音さん」

「あ……鏡音君」

「大丈夫だった？」

「……なんとか。親に嘘ついちゃったけど」

思わず下を向いてしまふ。バレたら……うつん、こんなことを考えるのはよそう。

「俺の家、こつちだから。ついてきて」

わたしは、鏡音君に後について歩き出した。やっぱりまだ緊張する。

しばらく歩くと、鏡音君の家に着いた。

「着いたよ」

鏡音君が鍵を出して、ドアを開けてくれた。わたしは「お邪魔します」と言っ、中に入る。鏡音君も後から入って、ドアに鍵をかけた。

「姉貴、帰ったよ！」

家の中に入った鏡音君は、家の奥に向かってそう叫んだ。ぱたぱたと音を立てて、奥の部屋から女の人が出てくる。ルカ姉さんと同

じぐらい……かな？ 活発そうな感じの、スタイルのいい、綺麗な人だ。この人が鏡音君のお姉さんなんだ。

「レン、お帰り。そちらがお友達？」

「そっだよ」

「初めまして、レンの姉のメイコです」

鏡音君のお姉さんは、笑顔でそう言っただけで頭を下げた。慌ててわたしも頭を下げる。

「は……初めまして。巡音リンです。鏡音君とは同じクラスです」
わたしはそう言っただけで、お姉さんは怪訝そうな表情になった。

「……巡音？」

「そうです……どうかしましたか？」

どうしたのかな。そう思った矢先、お姉さんが言い出したのは意外なことだった。

「昔の知り合いに同じ名字の人がいたから……もしかして、親戚か何か？ 巡音ハクって、いうんだけど……」

わたしは驚いてその場に立ち尽くした。鏡音君のお姉さんが、ハク姉さんと知り合い？

「姉をご存知なんですか？」

「え、姉ってことは、あなた、ハクちゃんの妹なの？」

ハク姉さんをちゃん付けで呼んでる……。

「あ……はい」

「やだ、嘘、信じられない。世間って狭いのねえ。まさか弟が、ハクちゃんの妹と同じクラスとは」

お姉さん、なんだか嬉しそう……。でも、わたしは困ってしまった。となると、この後は絶対……。

「姉貴、巡音さんのお姉さんを知ってたの？」

鏡音君が、お姉さんにそんなことを訊いている。

「高校の時の部活の後輩なのよ。卒業してからずっと会ってないんだけど。懐かしいな。ハクちゃんはどう？ 元気にしてる？」

やっぱり……。どうしよう。引きこもってますなんて言えない……

…。

「あ……えーと、その……」

わたしは困り果てて、結局また要領を得ない返事をしてしまった。
「姉貴、お客さんを玄関に立たせっぱなしにしとくの？」

不意に、鏡音君がそう言った。お姉さんがはつとした表情になる。

……もしかして、今の、わたしを助けてくれたんだろうか。

「ああ、ごめんごめん。さ、あがってちょうだい」

お姉さんがそう言っただけで脇に退いたので、わたしは靴を脱いで、鏡音君の家にあがり、脱いだ靴を揃えた。

「俺たちは予定どおり『RENT』を見るから、姉貴、邪魔しないでくれよ」

わたしの後からあがった鏡音君が、お姉さんにそんなことを言っている。

「はいはい、わかったわ。じゃ、私は自分の部屋にいるから、用があつたら呼んでちょうだい。それと、お客さんには失礼のないようにね」

鏡音君のお姉さんはそう言って、二階へと上がっていった。二階にお姉さんの部屋があるのね。

「巡音さん、こっち」

わたしは鏡音君の後について、隣の部屋に入った。畳敷きの和室で、中央に大きめの卓袱台、その周りに座布団が置いてある。

「適当に座ってて。今、お茶を淹れるから」

そう言われたので、わたしは座布団の一つに座った。鏡音君は居間に隣接しているキッチンに行つて、お茶道具を用意している。

「緑茶でいい？」

鏡音君が声をかけてきた。

「あ……うん」

わたしはまだ落ち着かない気分で、周囲を見回した。そんなに広くない——もつとも、わたしの感覚の方が一般的ではないのだろう——部屋は、おおむね片付いていた。サイドボードや本の詰まった

本箱が、壁際に置いてある。サイドボードの上の、大きめの写真立てがわたしの目に留まった。

その写真立てに入っていたのは、家族の集合写真だった。犬を抱いている男の子は、多分小学生の時の鏡音君だろう。隣にお姉さん、後ろに両親とおぼしき二人が立っている。お父さんの方はお姉さん、お母さんの方は鏡音君に似ている。

わたしが写真立てを見ていると、鏡音君がお茶を乗せたお盆を手に戻って来た。

「どうぞ」

鏡音君がわたしの前にお茶を置く。わたしはお礼を言った。

「……ありがとう」

写真のことを訊いてみたいけれど、いいものだろうか。わたしがためらっていると、鏡音君の方から説明してくれた。

「俺と姉貴と両親と、前に飼ってた犬。確か、旅行に出かけた先で撮ってもらったんだ」

「犬を飼ってたの？」

ミクちゃんはボメラニアンを飼っていて、ミクちゃんの家遊びに行った時に撫でさせてもらったりしている。ミク才君も種類は忘れたけど、大きな犬を飼っていて、いつだったか、庭でフリスビーを投げて遊んでいた。

「ああ、去年死んじゃったけど。巡音さんとは、ペットとかは？」

鏡音君に訊かれたので、わたしは首を横に振った。お父さんは、動物が嫌いだ。ミクちゃんのペットがうらやましくて、わたしも飼いたいとねだったけれど、許してもらえなかった。

「あの……そう言えば、鏡音君のお父さんとお母さんは？ 家にはないの？」

今日は日曜だから、たいていの人は家にいるはずなのに、出てきて挨拶をしたのはお姉さんだけだ。

「あー、えっとさ……うち、今、どっちもいないんだよ。あの写真を撮ったちよつと後に、父親が交通事故で亡くなって……」

鏡音君がそんな話を始めたので、わたしは固まってしまった。訊いてはいけないことを訊いてしまったみたい。

「……それは……その……ごめんなさい。わたし、そんなことだとは思わなくて……」

わたしは下を見ながら、やっとのことでそう言った。

「あんまり気にしないでくれ。実は……構えられるとこつちが辛くて、で、話戻すけど、そういうわけで、俺のところは母子家庭なんだ。で、母親の方は、去年から仕事で海外に行ってて、この家は実質上、俺と姉貴の二人暮らし。あ、夏と冬の休みの期間には、母さんも戻ってくるけど」

そう話す鏡音君の声は、普段とあまり変わらない。けれど、わたしは申し訳なくて、鏡音君の顔がまともに見れなかった。

「この話はここまでにして、『RENT』を見ようか」

……鏡音君は優しい。でも……だからかな。なんだか辛い。

道は歩くにつれてできるもの（後書き）

本人も言及していますが、この話のリンは滅茶苦茶箱入りなので、一人で外に出ることがほとんどありません。

ちなみに買い食いも基本的に禁止です。だから、ちょっと出かけた時にその辺のファーストフード店に入って、ということもありません。多分、ファーストフードの類を口にしたこと自体が皆無に近いかと……。

一步一步、一言一言

ミュージカル『RENT』は、不思議な作品だった。『ラ・ボエーム』とは、同じようできて、違う。『ラ・ボエーム』が十九世紀半ばのパリを舞台としているのに対し、『RENT』の舞台は二十世紀末のニューヨーク。百五十年でこんなに色々変わってしまったのかと思えるところ、ああ、やっぱり同じ話なんだと思えるところがあつて、わたしは見ていてちよつと混乱しかけた。

着ているものや、登場人物の考え方や扱われ方が違うだけではない。わたしはこの作品から、もっと「違う何か」を感じ取った。その、違いが何なのかはよくわからないけれど……。

『RENT』が終わって、画面がメニューモードに戻った後も、わたしはしばらく、そのまま画面を見つめ続けていた。頭の中で、今見た作品のかけらが回っているような、そんな感じた。

……こういう感覚、前にも憶えがある。いつだっただろうか。もう、ずっと前のことだけれど、確か……。

自分の思考に没頭していたわたしは、目の前に新しくお茶の入った茶碗を置かれて、我に返った。

「……ありがとう」

「どういたしまして。で、どうだった？ 『RENT』」

訊かれて、わたしは考え込んだ。鏡音君には、ちゃんと返事をしない。

「その……すごく、力強い作品なのね」

わたしがそう言うと、鏡音君は嬉しそうな表情になった。

「そう思う？」

「ええ」

『RENT』では、登場するキャラクターの一人一人の中に、しっかりした軸のようなものが感じられた。『ラ・ボエーム』の方では印象の薄いコッリーネやシヨナールも、『RENT』では強い印象

が残る。むしろ、彼らの方が強いと感じる人もいるだろう。

「『ラ・ボエーム』とは、同じようで全然違うから、ちょっと驚いたけど」

わたしがそう言うと、鏡音君は頷いた。

「『ラ・ボエーム』は恋愛だけに話を集中させていた感じがするけど、『RENT』では、生きていくことに焦点が当たってるから」

ああそうか。枠組みが一緒なのに、テーマ性が違うから、違う感じがするんだ。

生きていくこと……。

「でも、今日だけをみつめて生きて行くっていうのは、何だか悲しい感じがするわ」

何度もでてきたフレーズ。「あるのはただ、今日という日だけ」
きつと作り手が訴えたかったことなのだろうけれど。

「そうかな？」

「だって、過去も未来も見なくて、ただ、ここにある今だけを見つめて生きるんでしょう？　そうやって刹那の生に意識を集中させてしまえば、過去のこと未来のことも、思い煩うことはないわ。でも、そうしないと生きていけないっていう、その事実自体が辛い気がするの。そうやって結局、日々は過ぎて行くんだもの。積み重なってできた過去という時間を、全部見ないようにしちゃっているの？　無かったことにできるの？　その人を形作るのが、過去なんじゃない？　それを忘れて生きられるものなの？　未来だってそうよ。見ないようにしたって、いつかは来てしまうわ」

どんなに見ないようにしていても、いつかは終わりが来る。ロジャーもミミも、いつかは死んでしまう。この結末を、ハッピーエンドと見なしていいのだろうか。

「確かにそういう側面もあるんだろうけど……ロジャーもミミもエイズだし、ああいう『死が目の前にぶら下がっている』状態だと、それこそ、今、巡音さんが言ったように、その日一日一日だけに、意識を集中させていかないと辛いのかも」

鏡音君は真面目な表情で、そう語った。

「でも、ラーソン——あ、このミュージカルを作った人なんだけど——が考えていたことは、それだけじゃあないと思うな。このフレーズは最初、部屋に閉じこもっているロジャーをミミが誘いに来るシーンで使われるし。『悔やんでばかりだと人生を逃す』という歌詞にもあるとおり、過ぎた時間に囚われないことを訴えたかったんじゃないのかな」

わたしは、ハク姉さんのことを考えた。死ぬ病にかかっているわけではないけれど、ハク姉さんも部屋に閉じこもっている。閉じこもる一番の理由は……。

「ロドルフォは、結局、見たくなかったのよね」

「何を？」

「ミミがもうすぐ死ぬっていう現実。ロジャーも、きつとそう。自分もミミも、そんなにしないうちに死んでしまう。だからロドルフォは第三幕でミミと別れるし——春が来るのに別れるなんて、変なもの——ロジャーはギターを売ってサンタフェに引っ越すんだわ」

ハク姉さんは、何を見たくないんだろう？ ……訊いても、教えてくれそうにはない。そもそもわたしだって、何も考えないようにして過ごしてきた。考えたら、怖いことになりそうだったから。

でも、鏡音君と話をしてみても、こうやって、家に呼んでもらって確かに今でも色々と怖いけれど、それだけじゃないことがわかった。悩んだけど、来て良かったと思う。

そのとき、階段から下りてくる足音が聞こえてきた。お姉さんね。「ちよつといい？」

お姉さんは気を使ってくれているらしく、部屋には入ってこないで、廊下からそう声をかけてきた。

「いいよ」

鏡音君がそう言つと、お姉さんは部屋に入ってきた。

「姉貴、何か用？」

「あんたたち、お昼はどうするつもりなのかって訊きに来たのよ」

鏡音君の問いかけにお姉さんはそう答えた。あ……正午を大分過ぎてるんだわ。『RENT』と話に夢中になっていたから、気がつかなかった。

「何、姉貴、作ってくれるとでもいうわけ？」

「……あんたねえ。まあ、そのつもりで下りて来たんだけどね。スバゲッテイでいい？」

「作ってくれるんなら、なんでも」

お姉さんに鏡音君がそう答えている。

「巡音さんもそれでいい？ 姉貴の飯、一応それなりに食えるから」
「あのねえ……それが、作ってもらう側の言う台詞？」

お姉さんが呆れ顔で鏡音君を見ている。でも、本気で怒っているわけでもないみたい。

「あ……わたし、自分の分はお弁当持ってきたんですけど……」

図書館で一日過ごすと言って出てきたので、お母さんはお弁当を持たせてくれた。行きつけの図書館には飲食コーナーがあるので、図書館で一日過ごす時はそこで食べている。

「お弁当？ そういやハクちゃんのお弁当は、いつも手が込んでたわね……」

あ……藪蛇になってしまったかもしれない。また、ハク姉さんのことを訊かれたらどうしよう……。

「でも折角来たんだから、少しは食べて行ってちょうだい」

「あ……はい」

わたしは頷いた。お姉さんはそのままキッチンへと行ってしまふ。

……助かった。

「巡音さん、ちょっと待ってて」

不意に鏡音君はそう言って立ち上がると、お姉さんの後を追ってキッチンへと行ってしまった。……どうしたのかな。

しばらくそのまま待っていると、鏡音君が戻ってきた。

「とりあえずブロッコリーを入れるのは阻止した」

「嫌いな？」

「ああ」

そんなに不味いかな？

「緑黄色野菜は身体に良いはずだけど」

栄養の宝庫って、家庭科の授業では習ったし、お母さんもそう言っていた。

「姉貴と同じようなこと言わないでくれよ。不味いもんは不味い」
きっぱりとそう言う鏡音君。本気で嫌いみたい。

「パン粉とチーズをかけて、オーブンで焼くと美味しいと思うけど」
「絶対にパス！ それ、姉貴に言わないでくれよ。聞いたら試すから」

「そんなに嫌わなくてもいいのに」

「巡音さんだって、食べられないものの一つ二つぐらいあるだろ」
「それは、あるけど……」

正直、納豆は苦手だ。あの食感とにおいが受け付けない。

「それと一緒に。ちなみに、嫌いなものって何？」

「納豆とか…… オクラとか……」

オクラはまだ食べられなくもないけど、納豆だけはどうしても無理だったりする。我が家の食卓に乗ることはあまりないけれど、学校の給食で出た時は泣きたくなった。

「オクラは俺も苦手だけど、納豆は好き」

え〜と。どう返事したらいいんだろう。

「そんなに真面目な顔して考え込まなくてもいいってば」

鏡音君にそう言われてしまった。それからしばらく、わたしたちは料理に関する話を続けた。

キッチンの方から、「レン、ちょっとこっち来て」と、お姉さんが鏡音君を呼ぶ声がした。

「ちょっと行ってくる」

そう言って、鏡音君は、またキッチンに行ってしまった。今度はそんなにしないうちに、台拭きを片手に持って戻って来た。それで、テーブルの上を拭いている。

「巡音さん、緑茶と紅茶とコーヒーと、どれにする？」

「あ……じゃあ、紅茶を……」

「紅茶ね」と言って、鏡音君はキッチンへと戻っていった。今度はすぐ、フォークを手に持って戻ってくる。その後ろからお姉さんが、お皿の乗ったお盆を手に入ってきた。

「お待たせ」

お姉さんが手際よく、お皿をテーブルの上に置いて行く。キャベツとベーコンを使った、シンプルなパスタだ。

「はいどうぞ。飲み物を取ってくるから、ちょっと待っててね」

お姉さんは言ってしまった。わたしは、一応お弁当を取り出して、テーブルの上に置く。全部食べられるだろうか……。

「はい、リンちゃんは紅茶ね」

わたしの前に、紅茶の入ったカップが置かれる。鏡音君とお姉さんは、両方ともコーヒーみたい。

「あ、それがお弁当？」

お弁当箱を見て、お姉さんがそう訊いてきた。

「ええ」

「見てもいい？」

そう訊かれたので、わたしは頷いた。

「……どうぞ」

お姉さんはわたしのお弁当箱を手にとって、風呂敷を解いて蓋を開けた。

「わ……美味しそう」

中を見て、お姉さんは感激した様子でそう言った。

「他所のお弁当見るのってなんか、新鮮よね」

「あの……良かったら、少し食べます？ これ、全部はちょっとさすがに多くて……」

出されたものを残すのは気が咎めるし、かといってお弁当を残すとお母さんがまた心配しちゃうだろうし……。

「巡音さん、そんなこと言うとうちの姉貴、図に乗るよ」

「なんてこと言うのよあんたはっ！」

お姉さんはそう言って、鏡音君を軽くはたいた。

「あの……本当に、食べてくれた方が助かるから。お弁当を残して帰ると、心配されちゃうし……」

「リンちゃんもこう言ってくれていることだし。シェアしましょうか。取り皿持ってくるわね」

「だからさあ、姉貴……」

鏡音君の言葉を見無視して、お姉さんはキッチンに行ってしまった。

「巡音さんそこ、残すとうるさいの？」

「うるさいというか……この前貧血で倒れたから、お母さんがちょっと過敏になってるの」

そのせいか、最近のメニューは鉄分多めの料理が多い。昨日の夕食は、カキとほうれん草のクリームソース和えだった。

「鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタ、結構量があるし、これを食べるとお弁当を全部食べるのは無理だから。食べてもらった方がわたしも助かるの」

そこへ、お姉さんが取り皿を手に戻って来た。

「じゃ、食べましょうか」

一歩一歩、一言一言（後書き）

私自身はブロッコリーは美味しいと思いますが、嫌いな人、多いですね。

めーちゃんが作ったのはキャベツとベーコンをオリーブオイルで炒めておいて、そこに茹で上がったスパゲッティを投入してあわせるシンプルなパスタです。ささつと作れるので、お昼に重宝します。キャベツをブロッコリーに変えたり、ベーコンをソーセージに変えたりしても美味しいです。

何がわたしの心をひきつけるの

鏡音君のお姉さんが作ってくれたパスタは、とても美味しかった。鏡音君はああ言っていたけど、多分謙遜していたのだろう。

そのお姉さんは、わたしのお弁当箱のおかずを「美味しい」と感激しながら食べていた。鏡音君がやや呆れた表情で、そんなお姉さんを見ている。

ハク姉さんの先輩ということは、ルカ姉さんとハク姉さんの間ぐらいの年齢ってことよね。でも、全然感じが違う。賑やかだし、よく喋る。鏡音君との食事中のやりとりを聞いていて思ったのだけけど、わたしはルカ姉さんとも、ハク姉さんとも、あんな風に話をしたことがない。

お姉さんは食べ終わると、空になった食器を下げにキッチンに行った。わたしは、鏡音君に訊いてみることにした。

「鏡音君のお姉さんって、いつもあんなに賑やかなの？」

「姉貴？ まあね。大体いつも、うるさいくらいよく喋るよ」

そこへ、お姉さんが戻って来た。飲み物のお代わりが乗ったお盆を手に持っている。

「はい、どうぞ」

「……ありがとうございます」

わたしはカップを受け取って、口をつけた。

「ねえ、リンちゃんって、今の学校は、中学と高校、どっちから？」

不意に、お姉さんがそんなことを訊いてきた。わたしの通っている高校は、中高一貫の進学校で、お父さんの卒業した学校でもある。そしてわたしは中学の時から、今の学校に通っている。

「中学からです」

「ふーん、知ってるだろうけど、レンは高校からなのよ。やっぱり、編入と持ち上がりって、何か違いとかあったりする？」

そう言われても、わたしにはよくわからない。今までそんなこと

を、気にしたことがなかったし。それに、鏡音君が高校からの編入組であることも、今聞いて知ったぐらいだし……。

「ちよつとわかりません……」

「中にいるとわからないものかしらね」

お姉さんはそんなことを言っている。鏡音君が割って入った。

「姉貴、何だつてそんなことを訊くわけ？」

「ただの好奇心よ」

それが、お姉さんの答えだった。……今の答え方、鏡音君とそっくり。顔は似てないけど、こういうところは似てるんだ。

わたしも他の人から見ると、どこかしら、ルカ姉さんや、ハク姉さんに似てたりするのかな……。今ひとつピンとこないのだけれど。

「あんまり質問責めになると、巡音さんが困るだろ」

「リンちゃん、困ってる？」

「え……いいえ」

わたしは首を横に振った。これくらいなら、平気だ。答えられないのがちよつと心苦しいけど……。

「ほーら、こう言ってるじゃない」

「それは、巡音さんが姉貴に対して気を使ってるんだつてば。……」

巡音さん、姉貴に訊きたいことあるんだったらなんでも訊いていいよ。巡音さんばかり答えるのは、フェアじゃないから」

鏡音君は、今度はそんなことを言い出した。……訊きたいこと？

わたしは、お姉さんの方を見た。明るい笑顔だ。

「あの……」

「うん、何？ スリーサイズと体重以外だったら何でも訊いていいわよ」

訊いても、大丈夫かな……？

「……鏡音君から聞いたんですけど。お姉さんが、『ラ・ボエーム』のロドルフォのことを、ヘタレだつて言っていたつて。それで……」
そこまで言ったところで、お姉さんはくるつと鏡音君の方に向き直った。

「ちょっとあんた、リンちゃんになんてこと言ったの!？」

「話のネタにちょうどよかったから、つい……」

「ついじゃないわよついじゃ! 何考えてるの!？」

「だって本当のことだろ。姉貴が酔っ払ったあげく、ロドルフォをヘタレの甲斐性なしって怒鳴りまくったのも、脚本にケチつけまくったのも」

「だからってハクちゃんの妹にそんなこと、言わなくてもいいでしょうがっ!」

「その時は、巡音さんのお姉さんが姉貴の後輩だなんて知らなかったんだよっ! わかるかそんなことっ!」

鏡音君とお姉さんは喧嘩を始めてしまった。……どうしよう。こんなことにするつもりじゃなかったのに。

わたしが困っていると、不意に、鏡音君とお姉さんは、言い争うのを止めた。

「あ……えーと、その……」

「ああ、気にしないでリンちゃん。定例の姉弟喧嘩だから」

そう言われてしまった。え……でも……。

「で……『ラ・ボエーム』の話ね。確かに言っただし、今でもそう思うわよ。あの主人公はどうしようもないヘタレの甲斐性なしだって。だって、生活力はないし、つまらない理由で恋人を捨てるし——くだらないこと画策してる暇があるんなら、バイトして薬代の一つでも作ればいいのよ——最後の時は恋人の手すら握ってあげられないんじゃないやねえ。ヘタレとしか言いようがないわ」

「あの……すみません……」

訊かない方が良かったみたい。

「ああ、リンちゃんに怒ってるわけじゃないから、そんなに構えないで。怒ってるのはあの主人公に対してだから」

手をぱたぱた振りながら、お姉さんはそう言った。

「……えっと……」

「何?」

「そういうこと言うのって……怖くないんですか」

わたしがそう訊くと、お姉さんは首を傾げた。

「怖いって、何が？」

「その……プッチーニって、もともとイタリアオペラを代表する作曲家ですし、その中でも『ラ・ボエーム』は、彼の代表作で、最高傑作だって言う人もいるし、『泣けるオペラ』と評判だったりするし……」

「え、あれって『泣ける作品』だったの」

心底驚きましたという表情で、お姉さんはそう言った。ええーつと……わたしの持っているオペラの解説書とかには、そう書いてあるんだけど……。

「一応そのはずです……」

「うーん、でも、あれじゃ泣けないわねえ。何せ主人公がボンクラすぎるし」

そう断言するお姉さん。ボンクラでヘタレ……。ロドルフォはオペラの主人公の中では、嫉妬深いとはいえ、どちらかというと大人しい部類に入るのだけど……。他を見たら、どんな反応を示すんだろう？

「泣けるとか何とか云々以前に、姉貴その手の作品じゃ泣かないだろ。人を死なせて泣かせのシーンを作るのはあざとって、しょっちゅう言ってるじゃん」

鏡音君が口を挟んだ。……普段からそういう話をしているんだ。

「レンは黙ってて。あんたが口挟むと話がわき道に行くから」

お姉さんはぴしゃつとそう言ってしまった。

「で、リンちゃんは何が気になっているの？」

「あの……だから……高い評価を受けている作品に対して、そういうことを言っちゃっていいのかって……」

「そう言われてもねえ……実際に見ていてしらけちゃったわけだし。その、プッチーニって人には悪いんだけど、もうちょっと話の組み立て方を考えてほしいわ」

確かに、プッチーニのオペラは構成が無茶苦茶なところがある。

『ラ・ボエーム』はまだいい。『マノン・レスコー』を見た時は、あまりにストーリーの飛び方が唐突なので、わたしは見ていてひどく混乱した。

「そうねえ……じゃ、ちょっと訊くけど、リンちゃんはあれ見て泣いたの？」

「……いいえ」

そもそも、オペラは見て泣くものではないような気がする。息が詰まりかけたことなら何度かあるけれど。でも、それも、『ラ・ボエーム』ではないし……。

「結局、そこに帰結していくと私は思うのよね。例えば世界中の九十パーセントの人が認めた名作だって、あわない時はあわないんだし、リンちゃんはその作品を見てどう感じたのか、どう思ったのかわかることを、まずははっきり見極めないと」

お姉さんは真面目な口調で、そう言った。

「おかしくて笑っちゃうにせよ、逆に悲しくて泣いてしまうにせよ、自分がどう思うのかが大事でしょ。それがわからないんじゃ、自分がどこにいるのかもわからないわよ。そして更に自分の立ち居地をはっきりさせて、自分の考えってものを確立させて行く。そこが大事なんじゃないのかな」

わたしは……ずっと、考えることや、判断をすることが怖かった。そうすると、何もかもが終わってしまうような、そんな感情に囚われていた。

「まあ、更に付け加えさせてもらうと、一言だけ『つまらない』だの『泣きました』だので、終わらせてしまつのも良くないと思うのよね。せめてどうしてそう思ったのかぐらい、自分でちゃんと説明できなくちゃ。少なくとも、私自身は、自分で自分の感情や考えを、説明できるようにしておきたいの」

そこまで話すと、お姉さんはふうつと息を吐いて、コーヒーの残りを飲んだ。

「なんか、らしくもなく真面目な長話しちゃったわ」

「いえ……色々と、ありがとうございました」

本当に……今日来て良かった。

「あの……もう一つ、いいですか？」

わたしは鞆を手元に引き寄せて、中からDVDを取り出した。マスのオペラ『タイス』だ。

「もしよかったら、これを見てもらいたいんですが……」

お姉さんはDVDを受け取った。

「……『タイス』ね。これもオペラ？」

「はい。このオペラの主人公のことを、どう思っのかが知りたくて……わたし、どうにもよくわからなくて」

鏡音君のお姉さんが、アタナエルのことをどう思っのかが訊いてみたかった。ちよつと図々しいお願いかもしれないけれど……。

「巡音さん、『タイス』って、どういう意味？」

鏡音君が訊いてきた。

「ヒロインの名前なの。このパッケージの女性がそう。彼女は遊女というか、高級娼婦というか、吉原の花魁みたいな人なのね。で、主人公はアタナエルという男性で、修道士。オペラの舞台は四世紀のエジプト」

わたしはざつと設定を説明した。

「変わった設定だな」

「でも結構面白そうじゃない。今見てもいい？」

お姉さんがそう言った。

「わたしは構いませんが……」

鏡音君はいいんだらうか。視線を向けると、鏡音君が頷いた。

「俺もいいよ」

「じゃあ見ましょうか」

お姉さんは、『タイス』のDVDをプレーヤーにセットした。オペラが始まる。

オペラが始まって、大体十五分ぐらいが経過した頃だ。話の内容

としては、アタナエルがタイスの夢を見て、彼女を改心させることが神の意思なのだと主張する辺り。突然、鏡音君のお姉さんがくすくす笑い出した。

「あ、あの……？」

思わず、そつちを見てしまつわたし。

「あ、ああ、ごめんごめん……気にしないで……」

言いながら、相変わらずお姉さんは笑っている。鏡音君が、ちょっと呆れた声をお姉さんにかけた。

「姉貴、何がそんなにおかしいわけ？」

「だって……この主人公、あまりにもわかりやすすぎるバカやつてるんだもの。これが笑わずにいられますか」

お姉さんは笑いながらもきっぱりとそう言ったので、わたしは呆気に取られた。

「バカって……」

後の言葉が出てこない。こんなことを言われるとは思っていなかったし。

「バカって、どの辺が？」

鏡音君がお姉さんにそう訊いている。お姉さんはリモコンの一時停止ボタンを押すと、笑いながら説明を始めた。

「いや」だって、この主人公、アタナエルだっけ？ 要するにただ単にタイスのことが好きなのよ。タイスが墮落してるから救ってあげなければとか言ってるけど、結局のところ、彼女が自分以外の不特定多数の男と寝てるのが気に入らないってだけ。なのに、自分が身体売ってる女に恋をしてるってことを認めたくないから『タイスを救うのが神の与えた我が使命！』だなんて、必死こいて言い訳作って、そうやって自分の体面を保ってるの。いや、本当、笑えるわ」

そこから先は笑い声だけになった。わたしは、お姉さんに言われたことを考えてみた。アタナエルはタイスのことが好き？ 確かにオペラのラストはそういう幕切れだけれど……。

「周りの態度を見る限り、結構ランクが上の人みたいなんだけど、だから余計認められないんでしょうね。この立派な俺様が、あんな穢れた女になんか！ って感じで。援助交際やりまくってる女の子に恋をした優等生みたいなもんって言ったら、わかりやすいかしら？」

わたしが前に読んだオペラの解説書では、アタナエルはタイスを改心させようと接している間に、彼女の色香に堕ちたと説明されていた。でも、最初からタイスが好きだったのだと考えると、話の意味合いがかなり変わってくる。

「大体、たった一人の女のせいでも、都市全体が堕落するわけないでしょ。この男はそういう理屈でも作らないと、自分を騙せないのよでも、そうやって自分に嘘ついてごまかしたところで、どこかで限界来るわよ。まあ続きを見ましようか」

自分に……嘘をつく……

「まあ続きを見ましようか」

お姉さんはリモコンの再生ボタンを押した。オペラの続きが始まる。アタナエルが何かしら言う度に、お姉さんは吹き出していた。一方で、場所がニシアスの館に移り、タイスを始めとする複数の女性たちが登場して場が華やかになると、衣装に感嘆していた。

第二幕。一人になったタイスは鏡の前で現実を突きつけられる。そこにアタナエルがやってきて、信仰によって得られる永遠の幸福について語る。次第にアタナエルの説く世界へ、関心が傾いていくタイス。葛藤の後に、有名な瞑想曲が流れる。

「あれ、この曲って……？」

「『タイスの瞑想曲』といって、これ単独で演奏されることのある有名な曲なの」

『タイス』というオペラは知らなくても、この曲だけは聞いたことがあるという人も多い。意外とこういうことはよくある。例えば「天国と地獄」は、『天国と地獄』というオペラで使われる曲だ。他にも「真珠採りのタンゴ」や「韃靼人の踊り」等、元の作品を離れ

て有名な曲は多い。

瞑想曲の後、タイスはキリスト教への改宗を決意する。アタナエルはタイスに、不浄な仕事で築き上げた財産を、全て燃やして灰にしろと指導する。火は、おそらく浄化と結びついている。タイスはそれに従おうとするけれど、小さな象牙の像を取り出して、これだけは焼かないで、誰かに持ってほしいと訴える。古代の名工の手によるもので、価値のあるものだからと。でもそれがニシアスからの贈り物だと聞くと、アタナエルは激昂して「今すぐ壊してしまえ」と命じる。

お姉さんは、ここで派手に笑い転げた。テーブルの上に、突っ伏しそうな勢いで。

「ね？ 言ったとおりでしょ？」

「これは……確かにヤキモチ以外の何物でもないな」
鏡音君が頷いている。

「相手が自分の友達だから、なおさら許せないんでしょうねえ。でも、それを自分で自覚してない辺り、始末が悪いのよね……ああ、おかしい……」

お姉さんは笑いの発作を抑えこもうとしながら、そう言った。わたしはちよつと気になったので、訊いてみることにする。

「あの……そうなんですか？」

「ニシアスからのプレゼントだって聞くやいなや、即激怒する辺り間違いないわ。それまで割と落ち着いて聞いていたのに、急にぶつんしたでしょ。どう見てもこれは嫉妬ね」

きつぱりとお姉さんは断言してしまった。画面では、オペラが続いている。アタナエルはタイスを連れ出そうとし、アレクサンドリアの人々が激怒する。そこへニシアスがやってきて、金貨をばら撒いて二人の逃亡を助け、タイスへの別れの気持ちを歌う。ここで第二幕が終了。

第三幕では、アタナエルとタイスは女子修道院へ向かうため、砂漠を渡っている。疲労で倒れるタイス。アタナエルは初めてタイス

を氣遣う。その後タイスは修道院に入ってしまった、アタナエルは「もう会えないのか」と、淋しそうに彼女を見送る。解説書などではこの旅で情が移ったとか、魅惑されてしまったとか、書かれていることが多い。……お姉さんは相変わらず笑っている。

自分の修行場である砂漠の修道院に帰ってきたアタナエルだけど、その心が安らぐことはない。夢にタイスが現れ、彼を誘惑して苦しめるからだ。彼女を忘れられないと苦悩するアタナエル。……限界って、こういうこと？

「遅いつて！」と、お姉さんが突っ込んでいる。そこへ、タイスが死にかけているとの知らせが入り、アタナエルは女子修道院へと向かう。

いよいよオペラはフィナーレを迎える。タイスは瞑想曲の調べに乗せて「あなたのおかげで私は安らぎ、神の国へ入れる」と歌うのだけれど、アタナエルは「お前の美しさだけが真実だった。置いていかないでくれ！」と歌うのだ。二人の歌声がすれ違ったまま、タイスは死んでしまい、アタナエルは絶望して、最後の幕が下りる。「ああ、おかしかった……オペラがこんなに面白いとは思わなかったわ」

お姉さんは相変わらず笑いながらそう言った。え、えーと、どう答えれば……。まさかここまで笑われるとは思ってなかったし……。

「姉貴、今回は主人公がバカ入ってる割に怒らなかったね」

隣から、鏡音君がそんなことを言う。アタナエルって、鏡音君から見てもバカに見えるんだ……。

「んー、ここまで道化に徹されると、笑えて来ちゃって怒るところじゃなくなるわね。かなり主人公を突き放した作りになってる辺り、作った人もわかってやってるんじゃない？ それにしても救いよりのない主人公だわ。傲慢と嫉妬のあわせ技抱えてる人が、神の道を説くんだから。まず自分を振り返りなさいって」

アタナエルに救いが来ないイコール突き放した作り、と受け取っているみたい。悲劇性を増しただけだと思っていたのだけれど、

違うようだ。お姉さんの言うことを聞いていると、『タイス』が、今まで思っていたのとは、全然違うストーリーに見えてくる。

「俺は、その辺りが皮肉だと思うんだよね。だってこの主人公、自分に嘘ついて誤魔化しまくっているのに、ある意味ではタイスを救ってしまっただから」

今度は鏡音君がそんなことを言い出した。アタナエルの行動は本心から出たものでなくとも、タイスはそれによって一種の宗教的救いを得る。

……差し出された物が偽物でも、それに真摯な気持ちで向き合ったら、自分の中では本物になるということなのだろうか。でも、それを目の前で見せられるアタナエルは気の毒だ。

……タイスはどうなんだろう。宗教に生きて、あれで本当に良かったんだろうか。

「タイスは……幸せだったのかな」

最後彼女は幸せだ幸せだと何度も歌うけれど、その「天上の幸福」というのが、わたしにはよくわからない。

「俺は宗教の話はよくわかんないけど、幸せではあったんじゃないかな？」

「自分の心に素直に向き合った分、アタナエルよりは幸せな結末と言えるんじゃない？ 死ぬまでの日々は穏やかだったんじゃないのかな」

心に素直に向き合うこと……自分に嘘をつかないこと……。あの日の夢。わたしの中には……何か残っているものがあるのだろうか。「あの……ありがとうございました」

そう言つと、お姉さんはにっこり笑った。

「そんなかしこまらなくていいわよ。かなり言いたい放題だったし。面白い作品見せてくれて、こっちこそありがとう」

もう一つ……訊いてみよう。

「『ラ・ボエーム』と『タイス』だったら、どっちが好きですか？」
「当然『タイス』ね」

お姉さんは即座にそう答えた。……やっぱり、こっちなんだ。

と、ここでわたしは時間に気づいた。もつと話していたいけど、もう帰らなくちゃ。お迎えまでに図書館に戻れなくなってしまふ。

「あの……お話するのは楽しいんですけど、わたし、そろそろ帰らないと……」

「そう？　じゃあ、気をつけてね」

お姉さんはプレーヤーからDVDを取り出して、ケースに入れて渡してくれた。わたしはDVDケースとお弁当箱を、鞆に仕舞った。これでもう、忘れ物はないわよね。

「それでは、失礼します。今日はありがとうございました」

「駅まで送ってくよ」

鏡音君がそう言って立ち上がった。ちょっとほっとする。一人で駅まで戻るかどうか、自信がなかったから。

「……ありがとう」

わたしは鏡音君と一緒に、玄関から外に出た。お姉さんは、玄関まで見送ってくれた。

何がわたしの心をひきつけるの（後書き）

ちなみに、めーちゃんの料理の味ですが、この作品ではちゃんと美味しいレベルです。レンが手厳しいのは、血の繋がった姉だから弟という生き物は、姉の手料理なんて褒めないもんです。

それにしても、めーちゃん笑いすぎ……。

とはいえ、やや極論に走っているとはいえ、めーちゃんの言うことはポイントを突いている部分もあります。

よくわからない、という人には、実際に『タイス』を見てほしいんですが、マイナーな作品だからちよつと難しいかなあ。『ラ・ボエーム』なら、少し前にオペラを映画にしたものがあるので、レンタルショップなどで借りれると思うのですが。

死ぬ前に一度は生きてみたい

わたしは、鏡音君と一緒に駅へと向かった。来る時は緊張で周りの景色を見ることができなかったけれど、帰りの道はもう少しゆったりした気分で歩けたので、歩きながら辺りを眺めることができた。この辺りは住宅街なのか、小さな家がずっと並んでいる。

「姉貴の言うことは、あんまり真に受けない方がいいと思うんだよね」

鏡音君がそんなことを言うてきた。

「どうして？」

「んー、滅茶苦茶言う人だし、思ったこと全部言わないと気が済まないようなところあるし、言い回しに容赦が無いし……巡音さん、びつくりしたんじゃない？」

確かに驚いたけれど……でも、鏡音君のお姉さんのような人の方が、話しやすい気がする。少なくとも、話しかけたらいつもちゃんとした返事が返って来そうだし。

ルカ姉さんと最後にまともな話をしたのって、いつだっけ……。思い出せない。もしかしたら、そんな時間自体が無かったのかもしれない。

「驚きはしたけれど……鏡音君のお姉さんは、嫌いになったら、はつきり『嫌い』って、言うてくれそう」

「まあ、そりゃなあ……」

鏡音君が言いながら首を傾げている。伝わりにくかったみたいだけど、否定はされなかった。

……ルカ姉さんは、本当はわたしのことが嫌いなんじゃないか。時々そう思う時がある。でも訊いても穏やかな調子で「嫌いじゃないわ」とだけ、答えるんだろうな……。それに……こんなことを考えてしまうわたしの方が、おかしいのかもしれない。

そうこうするうちに、駅に着いた。券売機で帰りの切符を買うと、

わたしは鏡音君の方に向き直った。

「送ってくれて、ありがとう」

「これくらい大したことじゃないから」

「送ってくれたことだけじゃなくて……今日のこと全部、本当にありがとう。とても楽しかった」

こんなに気持ちが浮き立ったのは、本当に久しぶり。前にそう感じたの、いつだったろう。……思い出せない。

あれ……鏡音君、なんだかびっくりした表情でわたしを見ている。わたし、何か変なことを言ったの？

「……鏡音君、どうかした？」

「あ、いや……なんでも」

そう言われてしまうと、それ以上訊いてはいけないような気になる。……それに、もう行かないと。

「それじゃあ、わたしはこれで。また明日、学校で」

「ああ、気をつけてね」

わたしは鏡音君に向けて手を振ると、改札を抜けて、駅のホームへと向かった。急いで帰らなくちゃ。

幸い道に迷ったりすることもなく、わたしは無事図書館までたどり着いた。後はお迎えに来てもらえばいい。運転手さんに連絡して、図書館まで来てもらうと、わたしは家に帰った。

帰宅すると、また神威さんの車が止まっているのが目に入った。

なんとなく眺めていると、玄関のドアが開いて、神威さんとルカ姉さんが出てきた。

「それでは、行ってきます。そんなに遅くならないようにしますから」

神威さんがドアの方を振り向いて、そう言っている。ここからは見えないけれど、多分お母さんがいるのだろう。お父さんは今日は出かけているはずだから。

「楽しんでいらつしやい」

やっぱり、お母さんの声だ。神威さんは、「では」と言って、車に向かつて歩き出した。その少し後ろを、ルカ姉さんが歩いている。神威さんは車のドアを開けてルカ姉さんを乗せると、自分は運転席に乗り込み、走り出して行った。多分、食事にも行くのだろう。時々、二人はこうやって出かけている。

……でも。ルカ姉さん、楽しそうじゃないのよね。かといって、嫌がっているという風でもない。何だろう……何て言っているのか……。

わたしは頭を振ると、玄関に向かった。玄関には、まだお母さんが立っていた。

「リン、お帰りなさい」

「ただいま、お母さん。ルカ姉さん、出かけたんだ」

わたしがそう言つと、お母さんは頷いた。

「神威さんとお食事に行つてくるそうよ。楽しんできてくれると、いいのだけれど……」

ルカ姉さんの楽しみつて何なんだろう？ 今日、わたしは鏡音君の家に行つて、楽しかった。ルカ姉さんが何を楽しいと思つているのか、わたしには想像がつかない。

「……リン、何かいいことでもあったの？」

不意に、お母さんがそう訊いてきた。

「えっ……どうして？」

「そういう顔をしているから」

「あ……その……図書館に、面白い本があつたの。オペラに関する本」

本当のことを知られたらまずいと思つたわたしは、咄嗟に適當なことを言つた。これでごまかせるだろうか……。

「そう……良かったわね」

怪しまれてはいない……かな？ ごまかせたみたい。やっぱり申し訳ない気がするけれど。

「リン、お弁当箱を出しておいてね。夕ごはんは七時よ」

「わかったわ」

わたしはキッチンに向かうと、お弁当箱を流しの上に置いた。それから、階段を上って二階へと上がり、自分の部屋へと向かうとした時だった。

突然、近くの部屋からガラスか何かが割れる音が聞こえてきたので、わたしは驚いて立ち止まった。何なの？

音が聞こえて来たのは、ハク姉さんの部屋だった。わたしはおそるおそるハク姉さんの部屋に近づいて、耳を澄ました。……今は何の音も聞こえない。とりあえず、ドアをノックしてみる。

「……ハク姉さん？ リンだけど、何があったの？」

中からはやっぱり何も聞こえて来ない。……寝ているんだろうか。そう思った時、中から聞こえてきたのはけたたましい笑い声だった。「ハク姉さん？ どうしたの？」

返事はない。笑い声だけだ。ハク姉さん、どうしちゃったの……。わたしはドアの取っ手をつかみ、回してみた。あ……鍵、かかってないわ。

「ハク姉さん、入るわ……ちょっと、どうしたの!？」

部屋に入ったわたしは、思わず大きな声をあげてしまった。いつものように散らかった部屋の中、ハク姉さんは床にべったり座り込んで、赤い顔で笑っている。手にしっかり抱えているのは……お酒の瓶。

「あゝれゝ、リンじゃない。あははっ……」

「ハク姉さん、どうしちゃったの!？」

わたしはドアを閉めると、ハク姉さんの傍らに駆け寄った。ハク姉さんは相変わらず笑っている。……お酒臭い。ずいぶん飲んだみたい。あ、この瓶、応接室のガラス棚にあったウイスキーだわ。いつの間に持ち出したんだろう。

部屋を見回すと、壁際に粉々になったガラス片がまとまって落ちていた。どうやら、コップを壁に向かって投げつけたらしい。

「ハク姉さん……」

「リン、あんたも飲む？」

ハク姉さんはそう言っ、わたしにウィスキーの瓶を差し出した。
「……わたしは未成年よ」

とはいえ、このままにしておくのも良くないわよね。わたしはハク姉さんからウィスキーを取り上げると、テーブルの上に置いた。

「固いこと言わないの」

「固いこととかじゃなくて……それより、どうしちゃったのよ？」

ハク姉さんは成人しているから、飲酒自体は構わない。問題は、どうしてこんなになるまで飲んだのかということ。そもそも……ハク姉さん、お酒飲む人だっけ？

「ん、べつに」

「いつから飲んでるの？」

「わすれ」

わたしは困ってしまった。どうしたらいいんだろう。

「ハク姉さん……」

「どーせ、あたしは厄介者」

今度は歌いだした。うちで日常的にお酒を飲むのはお父さんぐら
いだし——お母さんとルカ姉さんは、おめでたい時にワインかカク
テルをグラス一杯飲むくらいだから——そのお父さんにしても、前
後不覚になるまで飲むなんてことはまずやらない。だから人が酔っ
払った時、どうしてあげたらいいのかわからない。……鏡音君だ
ったら知ってるのかな。お姉さんがお酒飲む、みたいなことを言っ
ていたし。

「……そう言えば、ハク姉さん。今日、ハク姉さんの先輩って人に
会ったの」

「へえ……誰？」

「鏡音メイコさん。ハク姉さんの高校の先輩だったって、言ってた
わ。ハク姉さんのこと、懐かしがってた」

対処に困ったわたしは、そんな話を始めてしまった。ハク姉さん

の焦点のあつてない目が、こつちを見る。

「……メイコ先輩？」

「そう、メイコ先輩」

わたしの言っていること、伝わっているのかな。そう思った時だった。ハク姉さんが、不意にわたしに抱きついてきた。

「……ハ、ハク姉さん!？」

「メイコせんぱあいつ!」

……苦しい。わたしはハク姉さんを離そうとしたけれど、向こうはすごい勢いでしがみついてくる。

「聞いてくださいよおメイコ先輩っ!」

「わたしは、メイコ先輩じゃないってば!」

叫んだけれど、ハク姉さんには聞こえていない……というか、伝わっていないみたいだった。

「あたしはいらな子なんですよお」

「ちよつと、ハク姉さん……」

「でもそれもしょーがないんです。だって、あたしだけデキが悪いんですから。不公平ですよねえ。姉も妹もデキがいいのに、あたしだけデキが悪いって。姉はともかく、妹は同じ遺伝子からできてるんですよ。神様って、どーして配慮つてものがないんですかあ」

ハク姉さんは、ものすごい勢いでばやし始めた。

「ね、ねえ、ハク姉さん……」

「この家はデキの悪い子はいらないですよお。あたしが受験に失敗した時、パパはあたしのこと、負け犬でも見るみたいな目で見ていたしい」

「……………」

「あたしの不幸は、こんな家に産まれたことから始まってんですよ。デキの良すぎるお姉ちゃんを持ったばかりに、小さい頃から比べられてばかり! パパも先生も、『ルカと比べて勉強ができない』『ルカと違って面倒ばかり起こす』って! 唯一の味方だったママは出て行っちゃったしい、妹はママの存在を忘れて継母なん

かにべつたり懐かしい」

そんなこと言われたって……わたしは実のお母さんの顔を憶えていないのだ。顔も憶えていない人を、どうやって懐かしがれというの？

「結局、あたしは中学も高校も受験に失敗して、パパからは『人生の落伍者』扱いされて、お姉ちゃんからは『私はあんたとは違うのよ』って目で見られてえ——あの人絶対人間じゃないです、きっとどこかで作られたいい子のロボットなんです——妹は妹であたしが落ちた中学にあっさり受かるしい」

わたしだって……好きで受験したんじゃないのに。それに「あっさり」受かったわけじゃない。わたしの成績は確かにそれなりのレベルだけれど、それでも、ルカ姉さんと比べるとやっぱり見劣りする。何しろルカ姉さんは、中高六年の間、ずっと学年トップだったのだ。七つ離れているとはいえ、古くからいる先生方から度々「お前のお姉さんは凄かった」と、どうしても言われてしまう。

「ハク姉さん、ぼやくのやめてよ！　わたしにどうしろって言いたいのか！？」

気がつく、わたしは叫んでいた。ハク姉さんが、反射的に黙る。「せんぱあい……相変わらず、手厳しいですねえ……」

ハク姉さんはまた笑い出した。さっきまでぼやいていたのに……酔っ払いつて、こういうものなんだろうか？

それにしても……鏡音君のお姉さんに、ハク姉さんはこういう話をしていただろうか。頭が痛くなってきた。明日、鏡音君にどんな顔をして会ったらいいんだろう。

「先輩って、前からそうですよねえ……あたしがサブ入らないってぼやいていたら、叱咤しながらも練習つきあってくれたしい……」
ハク姉さんは、わたしから離れて床に座り込んだ。でもまだ、わたしのことを鏡音君のお姉さんだと思っているみたい。

「……眠い」

わたしが困り果てていると、ハク姉さんはそんなことを言い出し

た。

「ハク姉さん、眠いって……」

「眠い……もう寝る」

ハク姉さんは子供みたいな口調でそう言うと、のろのろと立ち上がって、ベッドに向けて歩き出した。酔っ払っていても、ベッドに向かうんだ……。そのままどさっとベッドに倒れこむと、次の瞬間には寝息を立てている。

わたしはため息をつくくと、眠ってしまったハク姉さんに掛け布団をかけた。このままにしておいたら、風邪を引いてしまう。えーっと、このウイスキー、戻しておいた方がいいわよね。わたしはウイスキーの瓶を手に取ると、ハク姉さんの部屋を出た。

応接室は一階だ。瓶を抱えて階段を下りて行くと、お母さんとはったり会ってしまった。

「リン、どうしたの？」

「え、えーっと、その……」

わたしは途方にくれた。お母さんが、わたしの手にあるものを見る。

「それ……」

「……」

何て言えばいいんだろう。そう思っていると、お母さんはわたしの手から、ウイスキーの瓶を取り上げた。

「……ハクね？」

言われて、わたしは驚いた。

「知ってたの？」

そう訊くと、お母さんは頷いた。知ってたんだ……。

「リン、このことはお父さんには言わないでちょうだい。言つとまた話がこじれるから」

わたしは頷いた。お父さんが知ったら怒るだろう。そんな修羅場はわたしだって見たくない。

「お母さん……ハク姉さん、いつから飲んですの？」

「多分一年ぐらい前から。その頃から、応接室やキッチンのお酒が時々無くなるようになっていて……現場を押さえたのは半年ぐらい前だけど、止めるとあの子、余計荒れそうで……」

お母さんはため息をついて、ウイスキーの瓶を軽く振った。

「ずいぶん飲んだわね……これは戻しておくから、リンは自分の部屋に戻ってなさい」

「うん……わかった」

わたしは階段を上って、自分の部屋に入った。入った瞬間、疲れを感じて、ベッドの上に座り込む。

折角いい日だったのに、終わりがこれなんてあんまりだ。わたしだってお父さんに無理矢理受験させられたのに。自分の通った中学及び高校に、娘を通わせるのがお父さんの「ステータス」だったから。なんでわたしもなの、ルカ姉さんだけじゃ満足できないのって、どれだけ言いたかったことか。でも怖くて言えなかった。お父さんがわたしのぬいぐるみや絵本を捨てたのは、ハク姉さんが中学受験に失敗してから数日後だった。いつまでも子供っぽいことばかりしてるんじゃない、お前までハクと同じになるなって。あの日のことが怖くて怖くて、わたしは言われるまま大人しく勉強した。逆らったら、今度はわたしが捨てられるんじゃないかって気がして。

……涙がでてきた。わたしは自分の部屋で、ひとしきり泣いた。

そう言えば……絵本やぬいぐるみを捨てられてしまってから数ヶ月後、たまたま点けたテレビに映っていたのが、チャイコフスキーのバレエ『眠れる森の美女』だった。無くしてしまったおとぎ話の世界。わたしはうつとりとそれを見ていた。それを見たお母さんが、時々わたしを劇場へと連れて行ってくれるようになったんだ。

わたしはバレエやオペラの世界に夢中になった。『くるみ割り人形』『シンデレラ』『火の鳥』『ヘンゼルとグレーテル』『魔笛』……。お父さんは最初それも嫌がっていたけれど、ある時家に来た

お客さんがわたしのことを「バレエやオペラの鑑賞とは、高尚なご趣味ですね。この年齢で芸術がわかるなんて、きつとご両親の教育がよろしいでしょう」と褒めて以来、これに関してはさほどのさく言わなくなった。実を言えば、芸術がどうこうなんてわたしにはわからない。ただ、無くした世界を取り戻したかっただけなのだから。

それでも、お父さんがまた何か言い出すんじゃないかという恐怖だけは、拭いさることができなかった。いつもおとぎ話に近いものだけを見ていたら、変に思われるんじゃないか。お前は結局、小さい頃と何も変わってない、そう言われるんじゃないかって。だから無理をして難しいものも見るようにしていった。そして、解説書の類を買ってもらって、知識もつけた。咄嗟に何か訊かれたら、そのない受け答えができるようにするためだ。

そういうことをやっているうちに、わたしはこういうものを見始めた理由を忘れてしまった。そして劇場に通ったりDVDを鑑賞したりすることが、何も考えず時間を潰すための行為になってしまっていたんだ。何を見ても楽しいとか悲しいとか、そういう感情がどんどん湧いてこなくなつて。ただぼんやりとしていた。

……例外は、ミクちゃんという時だけ。ミクちゃんと一緒にいる時だけは、何かをすることが楽しかった。多分、ミクちゃんがいつも楽しそうにしているくれたからだろう。

「ミクちゃん……」

わたしたちは、同じ幼稚園に通っていて仲良くなった。その幼稚園は、いわゆる附属の幼稚園で、そこに入っていれば大学までエスカレーター式に進むことができた。けれどお父さんは、ルカ姉さんが中学受験に成功した時から、わたしとハク姉さんにも受験させると決めてしまった。

わたしは、ミクちゃんにその話ができなかった。だけど小学校の高学年になって、ミクちゃんが「中学になってもずーっとずーっと友達だからね」と言った時、黙っていることが後ろめたくなって、

受験の話打ち明けた。ミクちゃんは驚いていたけれど、次の日、あっけらかんとう言ってきたのだ。

「わたしも受験する。リンちゃんと一緒に中学に通いたいから」
わたしは哑然となった。ミクちゃんがこんなことを言い出すなんて、思ってもみなかったのだ。そして一緒に学校の通いたいと言ってくれたことが嬉しかった反面、こんなことに巻き込んでしまつてすまないと思わずにはいられなかった。

どうやったのかは知らないけれど、ミクちゃんは自分の両親を説得して、家庭教師をつけてもらい、その日から猛勉強を始めた。そして、わたしと一緒に受験して、合格した。合格発表の日、わたしたちは抱き合つて喜んだ。

ミクちゃんは、本当は受験なんてする必要はなかったんだ。ミクちゃんのお父さんは、わたしのお父さんのように勉強勉強とやかましく言わない。わたしと友達でさえなかったら、ミクちゃんは今も、最初の学校に通つてのんびり学生生活を送っていただろう。

わたしは自分の両腕をきつくつかんだ。爪が肌に食い込む。そうやって、ただずっとそこに座っていた。

死ぬ前に一度は生きてみたい（後書き）

クリュソミテースはこんな気持ちだったんだろうな、と思ってしま
うリンでした、というお話。父と母が逆だけど。

ちなみに、ル力は別にハクに対し「私はあると違うのよ」とま
では思っていない。まあ「どうでもいい」存在ではあるのですが
……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9358u/>

ロミオとシンデレラ

2011年9月26日21時57分発行